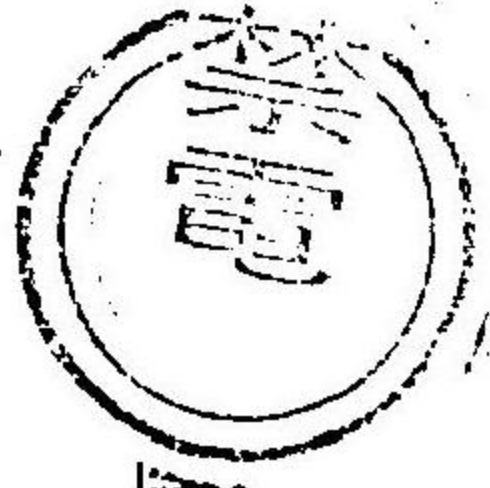


683
25

160
1348



政治學
講習會
講義錄
號外

新法附典全書
完

發賣所
東京
明法堂

CZ
5
0220

新法附典全書目次

裁判所構成法



○裁判所構成法

條例

裁判所

構成

法

條例

裁判所

構成

法

條例

裁判所

構成

法

條例

裁判所

構成

法

條例

裁判所

構成

法

條例

○裁判所書記長書記官等俸給

○裁判所位置及管轄區域表

○地方裁判所支部及其管轄區域裁判所

○區裁判所出張所管轄區域表

目次



一	百二十三丁
	百十七丁
	百十七丁
	百十四丁
	百〇六丁
	九十三丁
	八十六丁
	七十三丁
	六十五丁
	五十二丁
一	

民法

- 增價競賣法 一丁
- 裁判上代位法 十八丁
- 財産委棄法 二十丁
- 非訟事件手續法 二十一丁
- 辨濟提供規則 四十四丁
- 供託規則 四十七丁

商法

- 商法施行條例 一丁
- 商法第二百六條ニ依リ發行スヘキ債券ニ關スル件三十六丁
- 商事非訟事件印紙法 三十九丁
- 商法ニ從ヒ破産ノ宣告ヲ受ケタル者ニ關スル件 四十二丁
- 沖繩縣ニ商法施行延期ノ件 四十三丁

○ 船籍規則

四十三丁

○ 船籍規則施行細則

五十丁

○ 商業及船舶ノ登記ニ關スル件

五十六丁

○ 商業及船舶ノ登記公告ニ關スル取扱規則

五十八丁

民事訴訟法

- 民事訴訟法施行條例 一丁
- 民事訴訟費用法 七丁
- 民事訴訟用紙法 十一丁
- 家資分散法 二十丁
- 陸海軍軍法會議私訴裁判強制執行法 二十三丁
- 婚姻事件養子縁組事件及禁治産事件ニ關スル訴訟規則 二十五丁

新法附典全書目次畢

持14
551

新法附典全書

緩鹿實彰編纂

裁判所構成法



(明治廿三年二月
法律第六號)

朕其可所構成法ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此ノ法律ハ明治二十三年十月
キコトヲ命ス

裁判所及檢事局

自第一條至第十條

第二章 區裁判所……………自第十一條至第十八條

第三章 地方裁判所……………自第十九條至第三十三條

第四章 控訴院……………自第三十四條至第四十二條

裁判所構成法

第五章 大審院……………自第四十三條至第五十六條

第二編 裁判所及檢事局ノ官吏

第一章 判事又ハ檢事ニ任セラル、

ニ必要ナル準備及資格……………自第五十七條至第六十六條

第二章 判事……………自第六十七條至第七十一條

第三章 檢事……………自第七十九條至第八十四條

第四章 裁判所書記……………自第八十五條至第九十三條

第五章 執達吏……………自第九十四條至第一百條

第六章 廷丁……………自第一百一條至第一百一條

第三編 司法事務ノ取扱

第一章 開廷……………自第一百三條至第一百十一條

第二章 裁判所ノ用語……………自第一百五條至第一百十八條

第三章 裁判ノ評議及言渡……………自第一百十九條至第二百二十四條

第四章 裁判所及檢事局ノ事務章程……………自第二十五條

第五章 司法年度及休暇……………自第二十六條至第三十條

第六章 法律上ノ共助……………自第三十一條至第三十條

第四編 司法行政ノ職務及監督權……………自第四十條至第四十四條

裁判所構成法

第一編 裁判所及檢事局

第一章 總則

第一條 左ノ裁判所ヲ通常裁判所トス

第一 區裁判所

第二 地方裁判所

第三 控訴院

第四 大審院

第二條 通常裁判所ニ於テハ民事刑事ヲ裁判スルモノトス但シ法律

ヲ以テ特別裁判所ノ管轄ニ屬セシメタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第三條 地方裁判所控訴院及大審院ヲ合議裁判所トシ數人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於テ總テノ事件ヲ審問裁判ス但シ訴訟法又ハ特別法ニ別段規定シタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第四條 裁判所ノ設立廢止及管轄區域竝ニ其ノ變更ハ法律ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 各裁判所ニ相應ナル員數ノ判事ヲ置ク

第六條 各裁判所ニ檢事局ヲ附置ス檢事ハ刑事ニ付キ公訴ヲ起シ其ノ取扱上必要ナル手續ヲ爲シ法律ノ正當ナル適用ヲ請求シ及判決ノ適當ニ執行セラル、ヤヲ監視シ又民事ニ於テモ必要ナリト認ムルトキハ通知ヲ求メ其ノ意見ヲ述フルコトヲ得又裁判所ニ屬シ若ハ之ニ關ル司法及行政事件ニ付公益ノ代表者トシテ法律上其ノ職權ニ屬スル監督事務ヲ行フ

檢事ハ裁判所ニ對シ獨立シテ其ノ事務ヲ行フ

檢事局ノ管轄區域ハ其ノ附置セラレタル裁判所ノ管轄區域ニ同シ
若一人ノ檢事若ハ數人ノ檢事悉ク差支アリテ或ル事件ヲ取扱フコトヲ得サルトキハ裁判所長又ハ區裁判所ニ於テ判事若ハ監督判事ハ其ノ事件猶豫スヘカラサルニ於テハ判事ニ檢事ノ代理ヲ命シ其事件ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第七條 檢事局ニ相應ナル員數ノ檢事ヲ置ク

第八條 各裁判所ニ書記課ヲ設ク書記課ハ往復會計記錄其ノ他此ノ法律又ハ他ノ法律ニ特定シタル事務ヲ取扱フ

裁判所ニ附置セラレタル檢事局ニ於テ前項ノ如キ事務ヲ取扱フ爲必要ナリト認メタルトキニ限り別ニ書記課ヲ設クルコトヲ得但シ合議裁判所ノ檢事局ニ限ル

司法大臣ハ裁判所ノ會計事務ヲ專任スル爲特別官吏ヲ裁判所ニ置

シコトヲ得

第九條 區裁判所ニ執達吏ヲ置ク執達吏ハ裁判所ヨリ發スル文書ヲ送達シ及裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前項ノ外執達吏ハ此ノ法律又ハ他ノ法律ニ定メタル特別ノ職務ヲ行フ

第十條 法律ヲ以テ特定シタルモノヲ除ク外左ノ場合ニ於テ適當ノ申請アルトキハ關係アル各裁判所ヲ併セテ之ヲ管轄スル直近上級ノ裁判所ハ何レノ裁判所ニ於テ本件ヲ裁判スルノ權アルヤヲ裁判スル

第一 權限アル裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ裁判權ヲ行フコトヲ得ス且此ノ法律第十三條ニ依リ之ニ代ルヘキコトヲ定メラレタル裁判所モ亦之ヲ行フコトヲ得サルトキ

第二 裁判所管轄區域ノ境界明確ナラサルカ爲其ノ權限ニ付疑

ヲ生シタルトキ

第三 法律ニ從ヒ又ハ二以上ノ確定判決ニ因リ二以上ノ裁判所裁判權ヲ互有スルトキ

第四 二以上ノ裁判所權限ヲ有セストノ確定判決ヲ爲シ又ハ權限ヲ有セストノ確定判決ヲ受ケタルモ其ノ裁判所ノ一ニ於テ裁判權ヲ行フヘキトキ

第二章 區裁判所

第十一條 區裁判所ノ裁判權ハ單獨判事之ヲ行フ判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ其ノ裁判事務ヲ各判事ニ分配ス

此ノ事務分配ハ毎年地方裁判所長前以テ之ヲ定ム

區裁判所判事ノ取扱ヒタル事ハ裁判事務分配上其ノ事他ノ判事ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ効力ヲ失フコトナシ

判事二人以上ヲ置キタル區裁判所ニ於テハ司法大臣ハ其ノ一人ヲ監督判事トシ之ニ其ノ行政事務ヲ委任ス

第十二條 事務分配一タヒ定マリタルトキハ司法年度中之ヲ變更セス但シ一人ノ判事ノ分擔多キニ過キ又ハ判事轉退シ又ハ疾病其他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ヲ生シタル場合ハ此ノ限ニ在ラス

第十三條 區裁判所ノ判事差支アルトキハ毎年地方裁判所長ノ前以テ定メタル順序ニ從ヒ互ニ相代理ス但シ監督判事ノ職務ハ其ノ裁判所ノ判事官等ノ順序ニ從ヒ之ヲ代理ス

一ノ區裁判所ニ於テ法律上ノ理由若ハ特別ノ事情ニ因リ事務ヲ取扱フコトヲ得サルル之ニ代ルヘキ他ノ區裁判所ハ前項ニ同ク毎年以前以テ之ヲ定ム

第十四條 區裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス但

シ反訴ニ關リテハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ依ル

第一 百圓ヲ超過セサル金額又ハ價額百圓ヲ超過セサル物ニ關ル請求

第二 價額ニ拘ラス左ノ訴訟

(イ) 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據

若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃借人ノ差押ヘタルコトニ關リ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

(ロ) 不動産ノ經界ノミニ關ル訴訟

(ハ) 占有ノミニ關ル訴訟

(三) 雇主ト雇人トノ間ニ雇期限一年以下ノ契約ニ關リ起リタル訴訟

(ホ) 左ニ掲ケタル事項ニ付旅人ト旅店若ハ飲食店ノ主人トノ間ニ又ハ旅人ト水陸運送人トノ間ニ起リタル訴訟

(一) 賄料又ハ宿料又ハ旅人ノ運送料又ハ之ニ伴フ手荷物ノ運送料

(二) 旅店若ハ飲食店ノ主人又ハ運送人ニ旅人ヨリ保護ノ爲預ケタル手荷物金銭又ハ有價物

第十五條 區裁判所ハ非訟事件ニ付法律ニ定メタル範圍及方法ニ從ヒ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ有ス

第一 未成年者癡癩者白癡者失踪者其ノ他法律若ハ判決ニ因リ治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ後見人若ハ管財人ヲ監督スル事

第二 不動産及船舶ニ關ル權利關係ヲ登記スル事

第三 商業登記及特許局ニ登録シタル特許意匠及商標ノ登記ヲ爲ス事

第十六條 區裁判所ハ刑事ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 違警罪

第二 本刑五十圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二月以下ノ禁錮又ハ單ニ百圓以下ノ罰金ニ該ル輕罪

第三 刑法第二編第一章ヲ除キ其ノ他ノ輕罪ニシテ本刑二百圓以下ノ罰金ヲ附加シ若ハ附加セサル二年以上ノ禁錮又ハ單ニ三百圓以下ノ罰金ニ該リ其ノ情第二ニ掲ケタル刑ヨリ更ニ重キ刑ニ處スルコトヲ要セスト認メ地方裁判所若ハ其ノ支部ノ檢事局ヨリ區裁判所ニ移付シタルモノ

前項ノ手續ニ因リ訴追ヲ爲シ犯罪ノ證明アリタル場合ニ於テ判決ヲ爲ス前何時ニテモ其ノ情第二ニ掲ケタル刑ニテハ相當ニ罰スルコトヲ得スト認ムルトキハ區裁判所ハ之ヲ裁判スル權限ヲ有セストノ言渡ヲ爲ス此ノ場合ニ於テハ檢事ハ被告人ヲシテ相當ノ裁判所ニ於テ裁判ヲ受ケシムル爲相當ノ手續ヲ爲ス

第十七條 前數條ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ權限ハ此ノ章ニ掲ケタル事件ニ關リ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第十八條 各區裁判所ノ檢事局ニ檢事ヲ置ク

區裁判所檢事局ノ檢事ノ事務ハ其ノ地ノ警察官憲兵將校下士又ハ林務官之ヲ取扱フコトヲ得

司法大臣ハ適當ナル場合ニ於テハ區裁判所判事試補又ハ郡市町村ノ長ヲシテ檢事ヲ代理セシムルヲ得

第三章 地方裁判所

第十九條 地方裁判所ヲ第一審ノ合議裁判所トス

各地方裁判所ニ一若ハ二以上ノ民事部ヲ設ク

第二十條 各地方裁判所ニ地方裁判所長ヲ置ク

地方裁判所長ハ裁判所ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其行政事務ヲ監督ス
地方裁判所ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配

ヲ定ム

第二十一條 司法大臣ハ毎年各地方裁判所ノ判事一人若ハ二人以上

ニ其ノ裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事ノ豫審ヲ爲スコトヲ命ス

第二十二條 各地方裁判所ノ事務ハ司法大臣ノ定メタル通則ニ從ヒ

各部及各豫審判事ニ之ヲ分配ス

各地方裁判所ノ各部長及部員ノ配置及所長部長部員差支アルトキノ代理モ亦毎年以前以テ之ヲ定ム

前二項ニ掲ケタル諸件ハ裁判所長部長及部ノ上席判事一人ノ會議

ニ於テ裁判所長會長トナリ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル地方裁判所長ハ次年自ラ部長トナルヘキ

部ヲ指定スヘシ

第二十三條 或ル部ニ於テ着手シタル事務ニシテ司法年度ノ終若ハ休暇ノ始ニ臨ミ未タ終結ニ至ラサルモノハ裁判所長便利ト認ムル

トキ同部員ヲシテ引續キ之ヲ結了セシムルコトヲ得
豫審判事ノ取扱フ事務ニシテ未タ終結ニ至ラサルモノモ亦前項ニ
同シ

第二十四條 第二十二條ニ從ヒ事務ノ分配及判事ノ配置一タヒ定マ
リタルトキハ休暇中ヲ除キ一部ノ事務多キニ過キ又ハ判事轉退シ
又ハ疾病其ノ他ノ事故ニ因リ久ク闕勤スル者アル等引續キ差支ア
ルニ非サレハ司法年度中之ヲ變更セス

裁判所ノ事務其ノ現在ノ部ニ過多ナル場合ニ於テ司法大臣適宜ト
認ムルトキハ新ニ一部又ハ數部ヲ設クルコトヲ得

第二十五條 地方裁判所ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得
ス且同裁判所ノ判事中其代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ
事件緊急ナリト認ムルトキハ裁判所長ハ其ノ管轄區域内ノ區裁判
所判事又ハ豫備判事ニ其ノ代理ヲ命スルコトヲ得

第二十六條 地方裁判所ハ民事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有
ス

第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限又ハ第三十八條ニ定メタル控訴院ノ權限ニ屬
スルモノヲ除キ其ノ他ノ請求

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十七條 地方裁判所ハ刑事訴訟ニ於テ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有
ス

第一 第一審トシテ

區裁判所ノ權限並ニ大審院ノ特別權限ニ屬セサル刑事訴訟

第二 第二審トシテ

(イ) 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴

(ロ) 區裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二十八條 地方裁判所ハ破産事件ニ付一般ノ裁判權ヲ有ス

第二十九條 地方裁判所ハ非訟事件ニ關ル區裁判所ノ決定及命令ニ對シ法律ニ定メタル抗告ニ付裁判權ヲ有ス

第三十條 地方裁判所ノ權限並ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第三十一條 司法大臣ハ地方裁判所ト其ノ管轄區域内ノ區裁判所ト遠隔ナルカ若ハ交通不便ナルカ爲至當ト認ムルトキハ地方裁判所ニ屬スル民事及刑事ノ事務ノ一部分ヲ取扱フ爲一若ハ二以上ノ支部ノ設置ヲ命スルコトヲ得且支部ヲ開クヘキ區裁判所ヲ定ム支部ニハ之ヲ設置シタル區裁判所若ハ近隣ノ區裁判所ノ判事ヲ用

ウルコトヲ得此ノ場合ニ於テ判事ヲ選用スルノ權ハ司法大臣ニ屬ス

司法大臣ハ支部ニ勤ムヘキ豫審判事及檢事ヲ命ス

司法大臣ハ支部ノ本部タル地方裁判所ノ管轄區域内ノ區裁判所判事ニ豫審判事ヲ命スルコトヲ得

代理ニ關ル第二十五條ハ支部ニモ亦之ヲ適用ス

第三十二條 地方裁判所ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ三人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ三人ノ判事中一人ヲ裁判長トス且豫備判事ハ如何ナル事情アルモ二人以上其ノ部ニ列席スルコトヲ得ス其ノ他ノ事件ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第三十三條 各地方裁判所ノ檢事局ニ檢事正ヲ置ク檢事正ハ檢事局ノ事務取扱ヲ分配指揮及監督ス但シ檢事局ノ其ノ他ノ檢事ハ事務

取扱ニ付何等ノ事件ニ拘ラス特別ノ許可ヲ受ケスシテ檢事正ヲ代理スルノ權ヲ有ス

第四章 控訴院

第三十四條 控訴院ヲ第二審ノ合議裁判所トス

各控訴院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第三十五條 各控訴院ニ控訴院長ヲ置ク

控訴院長ハ控訴院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

控訴院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第三十六條 事務ノ分配及結了並ニ判事ノ代理ニ付テハ第二十二條

第二十三條及第二十五條ノ左ノ變更ヲ以テ控訴院ニ適用ス

第一 前項ニ掲ケタル各條ヲ以テ地方裁判所長ニ與ヘタル權ハ控訴院長ニモ之ヲ與ヘタルモノトス

第二 控訴院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同

院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ控訴院長ヨリ其ノ控訴院所在地ノ地方裁判所長ニ通知シ其ノ裁判所ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得但シ豫備判事ヲ用井ルコトヲ得ス

第三十七條 控訴院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 地方裁判所ノ第一審判決ニ對スル控訴

第二 區裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ付爲シタル地方裁判所ノ判決ニ對スル上告

第三 地方裁判所ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第三十八條 皇族ニ對スル民事訴訟ニ付第一審及第二審ノ裁判權ハ東京控訴院ニ屬ス但シ第一審ノ訴訟手續ニ付テハ地方裁判所ノ第

一審手續ヲ適用ス

第三十九條 控訴院ノ權限並ニ其裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ

此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第四十條 控訴院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ五人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第四十一條 第三十八條ノ場合ニ於テ第一審ハ五人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ審問裁判シ第二審ハ特ニ七人ノ判事ヲ以テ組立タル部ニ於テ審問裁判ス其ノ五人又ハ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス

第四十二條 各控訴院ノ檢事局ニ檢事長ヲ置ク

檢事長並ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第五章 大審院

第四十三條 大審院ヲ最高裁判所トス

大審院ニ一若ハ二以上ノ民事部及刑事部ヲ設ク

第四十四條 大審院ニ大審院長ヲ置ク

大審院長ハ大審院ノ一般ノ事務ヲ指揮シ其ノ行政事務ヲ監督ス

大審院ノ各部ニ部長ヲ置ク部長ハ部ノ事務ヲ監督シ其ノ分配ヲ定ム

第四十五條 大審院ノ事務ノ分配並ニ代理ノ順序ハ毎年部長ト協議シ大審院長前以テ之ヲ定ム

大審院長ハ次年自ラ上席セントスル部ヲ指定スヘシ

大審院ノ判事差支ノ爲或ル事件ヲ取扱フコトヲ得ス且同院ノ判事中其ノ代理ヲ爲シ得ヘキ者ナキ場合ニ於テ其ノ事件緊急ナリト認ムルトキハ之ヲ代理スル判事ヲ出スヘキ旨ヲ大審院長ヨリ其ノ所

在地ノ控訴院長ニ通知シ其ノ控訴院ノ判事ヲシテ代理ヲ爲サシムルコトヲ得

第四十六條 大審院長ハ何時ニテモ部長若ハ部員ノ承諾ヲ得テ之ヲ他ノ部ニ轉セシムルコトヲ得

第四十七條 大審院ニ於テ一タヒ定マリタル部ノ組立ヲ變更シタルトキハ現ニ取扱中ノ事務ニ付テハ第二十三條ヲ適用ス

司法年度中事務分配ノ變更ニ付テハ第二十四條ヲ適用ス

第四十八條 大審院ニ於テ裁判ヲ爲スニ當リ法律ノ點ニ付テ表シタル意見ハ其ノ訴訟一切ノ事ニ付下級裁判所ヲ羈束ス

第四十九條 大審院ノ或ル部ニ於テ上告ヲ審問シタル後法律ノ同一ノ點ニ付會テ一若ハ二以上ノ部ニ於テ爲シタル判決ト相反スル意見アルトキハ其ノ部ハ之ヲ大審院長ニ報告シ大審院長ハ其ノ報告ニ因リ事件ノ性質ニ從ヒ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部又ハ民事及刑

事ノ總部ヲ聯合シテ之ヲ再ヒ審問シ及裁判スルコトヲ命ス

第五十條 大審院ハ左ノ事項ニ付裁判權ヲ有ス

第一 終審トシテ

(イ) 第三十七條第二ニ依リ爲シタル判決及第三十八條ノ第一審ノ判決ニ非サル控訴院ノ判決ニ對スル上告

(ロ) 控訴院ノ決定及命令ニ對スル法律ニ定メタル抗告

第二 第一審ニシテ終審トシテ

刑法第二編第一章及第二章ニ掲ケタル重罪並ニ皇族ノ犯シタル罪ニシテ禁錮又ハ更ニ重キ刑ニ處スヘキモノ、豫審及裁判

第五十一條 前條第二ニ掲ケタル事件ニ付大審院ハ必要ナリト認ムルトキハ事件ノ審問裁判ヲ爲ス爲控訴院若ハ地方裁判所ニ於テ法廷ヲ開クコトヲ得

此ノ場合ニ於テハ控訴院判事ヲ以テ部員ニ加フルコトヲ得但シ其

ノ半數ニ滿ツルコトヲ得ス

第五十二條 大審院ノ權限並ニ其ノ裁判權ヲ行フノ範圍及方法ニシテ此ノ法律ニ定メサルモノハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第五十三條 大審院ニ於テ訴訟法ニ依リ法廷ニ於テ審問裁判スヘキ事件ハ七人ノ判事ヲ以テ組立テタル部ニ於テ之ヲ審問裁判ス其ノ七人ノ判事中一人ヲ裁判長トス其ノ他ノ事件ハ訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ判事之ヲ取扱フ

第五十四條 第四十九條ニ定メタル場合ニ於テハ聯合部ノ判事少クトモ三分ノ二列席スルコトヲ要ス

前項ノ場合ニ於テ民事ノ總部若ハ刑事ノ總部聯合スルトキ又ハ民事及刑事ノ總部聯合スルトキハ總部ノ判事中官等最モ高キ者ヲ部長ト爲ス大審院長ハ至當ナリト認ムルトキハ自ラ總部ニ長タルノ權ヲ有ス

第五十五條 大審院長ハ第五十條ニ依リ大審院ニ於テ第一審ニシテ終審ヲ爲スヘキ各別ノ場合ニ付大審院ノ判事ニ豫審ヲ命ス但シ便宜ニ依リ各裁判所判事ヲシテ豫審ヲ爲サシムルコトヲ得

第五十六條 大審院ノ檢事局ニ檢事總長ヲ置ク

檢事總長並ニ其ノ他ノ檢事ノ職權ニ付テハ第三十三條ヲ適用ス

第二編 裁判所及檢事局ノ官吏

第一章 判事又ハ檢事ニ任セラル、ニ必要ナル準備及資格

第五十七條 判事又ハ檢事ニ任セラル、ニハ第六十五條ニ掲ケタル場合ヲ除キ二回ノ競争試験ヲ經ルコトヲ要ス

第五十八條 志願者前條ノ競争試験ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格並ニ此ノ試験ニ關ル細則ハ判事檢事登用試験規則中ニ司法大臣之ヲ定

第一回試験ニ及第シタル者ハ第二回試験ヲ受クルノ前試補トシテ

裁判所及検事局ニ於テ三年間實地修習ヲ爲スコトヲ要ス
前項ノ修習ニ關ル細則モ亦試験規則中ニ之ヲ定ム

第五十九條 司法大臣ハ試補ノ行狀罷免スルニ足レリト認ムルトキ
ハ何時ニテモ之ヲ罷免スルコトヲ得此ノ罷免ニ關ル細則モ亦試験
規則中ニ之ヲ定ム

第六十條 一年以上修習ヲ爲シタル試補ハ其ノ修習ヲ現ニ監督スル
判事ノ命アルトキ區裁判所ニ於テ或ル司法事務ヲ取扱フコトヲ得
豫審判事及地方裁判所ノ受命判事モ亦其ノ附屬ノ試補ヲシテ自己
ニ代リ或ル事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第六十一條 試補ハ如何ナル場合ニ於テモ左ノ事務ヲ取扱フノ權ヲ
有セス

第一 訴訟事件ト非訟事件トニ拘ラス裁判ヲ爲ス事

第二 證據ヲ調フル事但シ前條第二項ノ場合ヲ除ク

第三 登記ヲ爲ス事

第六十二條 第二回ノ競争試験ニ及シタル試補ハ判事又ハ検事ニ
任セラル、コトヲ得

第六十三條 新任ノ判事又ハ検事ハ闕位アルトキ之ヲ區裁判所若ハ
地方裁判所ノ判事又ハ區裁判所若ハ地方裁判所ノ検事局ノ検事ニ
補ス

司法大臣ハ闕位アルマテ新任ノ判事又ハ検事ニ豫備判事又ハ豫備
検事トシテ勤務スルコトヲ命シ之ヲ司法省又ハ地方裁判所又ハ其
ノ裁判所ノ検事局ニ用ウ

第六十四條 區裁判所又ハ地方裁判所又ハ其ノ検事局ニ用ヒラレタ
ル豫備判事又ハ豫備検事ハ判事又ハ検事差支アリテ職務ニ從事ス
ルコトヲ得ス且通常代理ノ規程ニ依リ難キコトアルトキハ第三十
二條ノ制限ニ從ヒ司法大臣ハ之ニ其ノ判事又ハ検事ヲ代理セシム

ルコトヲ得

司法大臣ハ區裁判所又ハ地方裁判所ノ判事又ハ其ノ檢事局ノ檢事ニ一時闕位アル間ハ此ノ法律ノ範圍内ニ於テ豫備判事又ハ豫備檢事ヲ以テ之ヲ充タスコトヲ得

第六十五條 三年以上帝國大學法科教授若ハ辯護士タル者ハ此ノ章ニ掲ケタル試験ヲ經スシテ判事又ハ檢事ニ任セラル、コトヲ得
帝國大學法科卒業生ハ第一回試験ヲ經スシテ試補ヲ命セラル、コトヲ得

第六十六條 左ニ掲ケタル者ハ判事又ハ檢事ニ任セラル、コトヲ得
ス

第一 重罪ヲ犯シタル者但シ國事犯ニシテ復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免レサル者

第二章 判事

第六十七條 判事ハ勅任又ハ奏任トシ其ノ任官ヲ終身トス

第六十八條 大審院長ハ勅任判事ノ中ヨリ天皇之ヲ補シ各控訴院長及大審院ノ部長ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任判事ノ中ヨリ之ヲ補ス其ノ他ノ判事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第六十九條 五年以上判事タル者又ハ五年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ控訴院判事ニ補セラル、コトヲ得ス

第七十條 十年以上判事タル者又ハ十年以上檢事帝國大學法科教授若ハ辯護士ニシテ判事ニ任セラレシ者ニ非サレハ大審院判事ニ補セラル、コトヲ得ス

第七十一條 第六十九條及第七十條ニ掲ケタル年限ヲ算フルニハ補

職ノ時マテ各其ノ條ニ列記シタル職務ノ一ノミニ引續キ從事シタルコトヲ必要トセス

第七十二條 判事ハ在職中左ノ諸件ヲ爲スコトヲ得ス

第一 公然政事ニ關係スル事

第二 政黨ノ黨員又ハ政社ノ社員トナリ又ハ府縣都市町村ノ議會ノ議員トナル事

第三 俸給アル又ハ金錢ノ利益ヲ目的トスル公務ニ就ク事

第四 商業ヲ營ミ又ハ其ノ他行政上ノ命令ヲ以テ禁シタル業務ヲ營ム事

第七十三條

第七十四條及第七十五條ノ場合ヲ除ク外判事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ轉官轉所停職免職又ハ減俸セラル、コトナシ但シ豫備判事タルトキ及補闕ノ必要ナル場合ニ於テ轉所ヲ命セラル、ハ此ノ限ニ在ラス

前項ハ懲戒取調又ハ刑事訴追ノ始若ハ其ノ間ニ於テ法律ノ許ス停職ニ關係アルコトナシ

第七十四條 判事身體若ハ精神ノ衰弱ニ因リ職務ヲ執ルコト能ハサルニ至リタルトキハ司法大臣ハ控訴院又ハ大審院ノ總會ノ決議ニ依リ之ニ退職ヲ命スルコトヲ得

第七十五條 法律ヲ以テ裁判所ノ組織ヲ變更シ又ハ之ヲ廢シタル場合ニ於テ其ノ判事ヲ補スヘキ闕位ナキトキハ司法大臣ハ之ニ俸給ノ半額ヲ給シテ闕位ヲ待タシムルノ權ヲ有ス

第七十六條 判事ノ官等俸給及進級ニ關ル規程ハ勅令ノ定ムル所ニ依ル(明治廿三年勅令第百五十八號ヲ以テ判事檢事官等俸給令ヲ定ム)

第七十七條 判事ハ退職シタルトキハ恩給法ニ依リ恩給ヲ受ク

第七十八條 判事ノ俸給ハ判事ニ對シ懲戒取調又ハ刑事訴追ヲ始メタルカ故ニ停職シタルニ拘ラス引續キ之ヲ給ス

第三章 検事

第七十九條 検事ハ勅任又ハ奏任トス

第七十六條及第七十七條ハ検事ニモ亦之ヲ適用ス

検事總長及検事長ノ職ハ司法大臣ノ上奏ニ因リ勅任検事ノ中ヨリ補ス其ノ他検事ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十條 検事ハ刑法ノ宣告又ハ懲戒ノ處分ニ由ルニ非サレハ其ノ意ニ反シテ之ヲ免職スルコトナシ

第八十一條 検事ハ如何ナル方法ヲ以テスルモ判事ノ裁判事務ニ干渉シ又ハ裁判事務ヲ取扱フコトヲ得ス

第八十二條 検事ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

第八十三條 検事總長検事長及検事正ハ其ノ各管轄區域内ノ裁判所ノ検事ノ職務ノ範圍内ニ在ル事務ヲ自ラ取扱フノ權ヲ有ス

検事總長及検事長及検事正ハ其ノ管轄區域内ニ於テ或ル検事ノ取

扱フヘキ事務ヲ他ノ検事ニ移スノ權ヲ有ス

第八十四條 司法警察官ハ検事ノ職務上其ノ検事局管轄區域内ニ於テ發シタル命令及其ノ検事ノ上官ノ發シタル命令ニ從フ

司法省又ハ検事局及内務省又ハ地方官廳ハ協議シテ警察官中各裁判所ノ管轄區域内ニ於テ司法警察官トシテ勤務シ前項ノ命令ヲ受ケ及之ヲ執行スルモノヲ定ム

第四章 裁判所書記

第八十五條 裁判所ニ第八條ニ從ヒ相應ナル員數ノ書記ヲ置ク

區裁判所ノ各判事及合議裁判所ノ各部ノ爲少クトモ一人ノ書記ヲ置ク

第八十六條 地方裁判所ノ書記課ニ監督書記ヲ置ク控訴院及大審院ノ書記課ニ書記長ヲ置ク

區裁判所及検事局ノ書記課ニ二人以上ノ書記ヲ置キタルトキハ其

ノ一人ヲ監督書記トス

監督書記及書記長ハ各其ノ上官ノ命令ニ服從シテ書記課ノ事務ヲ指揮監督ス

第八十七條 書記其ノ職務ノ範圍内ニ於テ取扱ヒタル事ハ既ニ定マリタル事務分配上其ノ事他ノ書記ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其ノ効力ヲ失フコトナシ

第八十八條 書記ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス

書記長ハ奏任トス

書記長ノ職ハ司法大臣之ヲ補ス

第八十九條 書記ニ任セラル、ニハ勅令ノ定ムル所ニ依リ試験ヲ經ルコトヲ要ス

志願者前項ノ試験ヲ受ケ得ルニ必要ナル資格並ニ此ノ試験及試験ヲ經タル後爲スヘキ修習ニ關ル細則ハ裁判所書記登用試験規則中

ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十條 書記ニ任セラレタル者闕位ナキ間ハ豫備書記ニ補ス

豫備書記ハ書記トシテ臨時勤務ヲ命セラル、コトヲ得

第九十一條 書記ハ其ノ上官ノ命令ニ從フ

裁判所ノ開廷ニ於テハ裁判長ノ命令ニ從ヒ又判事一人ナルトキハ其ノ判事ノ命令ニ從フ

書記ハ檢事局ニ勤務スルトキ又ハ特別ノ事務ニ付判事若ハ檢事ニ附属シタルトキモ亦其ノ檢事局又ハ判事若ハ檢事ノ命令ニ從フ
前二項ノ命令ニシテ口述ノ書取ニ關ルカ又ハ書類記録ノ調製若ハ變更ニ關ル場合ニ於テ其調製若ハ變更ヲ正當ナラスト認ムルトキハ書記ニ自己ノ意見ヲ記シテ之ニ添フルコトヲ得

前四項ニ掲ケタルモノヲ除ク外書記ノ職務及其ノ事務取扱方法ハ書記ニ關ル規則中ニ司法大臣之ヲ定ム

第九十二條 合議裁判所長又ハ區裁判所ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所ニ於テ修習中ノ試補ニ書記ノ事務ヲ臨時取扱ハシムルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ職務上署名ヲ要スルトキハ特別ノ許可ヲ得テ署名スル旨ヲ記ス

第九十三條 豫備書記ハ事務ノ取扱ニ於テハ書記ニ同シ但シ書記規則中ニ制限ヲ設ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第五章 執達吏

第九十四條 各區裁判所ニ第九條ニ從ヒ相應ナル員數ノ執達吏ヲ置ク

第九十五條 執達吏ハ司法大臣之ヲ任シ及之ヲ補ス司法大臣ハ控訴院長ニ其ノ管轄區域内ノ裁判所ノ執達吏ヲ任シ及補スルノ權ヲ委任スルヲ得執達吏ニ任セラル、ニ必要ナル資格並ニ試験ニ關ル

規則ハ司法大臣之ヲ定ム(明治廿三年司法省令第二號ヲ以テ執達吏登用規則ヲ定ム)

第九十六條 執達吏ハ手数料ヲ受ク其ノ手数料一定ノ額ニ達セサルトキ補助金ヲ受ク(明治廿三年法律第五十二號ヲ以テ執達吏手数料規則ヲ定ム)

第九十七條 執達吏ハ其ノ所属區裁判所ヲ管轄スル地方裁判所管轄區域内ノ何レノ場所ニ於テモ其ノ職務ヲ行フ

第九十八條 裁判所ヨリ發スル文書ニシテ送達ヲ要スルモノハ執達吏ヲ以テ之ヲ送達ス但シ書記ヨリ直接ニ若ハ郵便ヲ以テ送達スルコトヲ法律ノ許ス場合ハ此ノ限ニ在ラス

執達吏ハ刑事ニ付警察官ヲ以テ執行ヲ爲サ、ル場合ニ限り裁判所ノ裁判ヲ執行ス

前二項ニ掲ケタルモノヲ除ク外執達吏ノ權限ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依ル

第九十九條 執達吏ハ其ノ職務ヲ適實ニ行フ爲保証金ヲ出スコトヲ

要ス執達吏ノ職務細則並ニ保証金ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム
第百條 執達吏ハ其ノ所属裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其ノ
裁判所ヲ管轄スル地方裁判所ノ上官ノ命ヲ受ケタル書記及其書記
ノ上官ノ命令ニ從フ

第六章 廷丁

第百一條 廷丁ハ大審院控訴院及地方裁判所ニ於テハ裁判所長區裁
判所ニ於テハ地方裁判所長之ヲ雇ヒ及其ノ雇ヲ解ク

第百二條 廷丁ハ開廷ニ出頭セシメ及司法大臣ノ發シタル一般ノ規
則中ニ定メタル事務ヲ取扱ハシム
區裁判所ハ執達吏ヲ用弗ルコト能ハサルトキハ其ノ裁判所所在地
ニ於テ書類ヲ送達スル爲廷丁ヲ用弗ルコトヲ得

第三編 司法事務ノ取扱

第一章 開廷

第百三條 開廷ハ裁判所又ハ支部ニ於テ之ヲ爲ス

司法大臣ニ於テ事情ニ因リ必要ナリト認ムルトキハ區裁判所ヲシ
テ其ノ管轄區域内ノ一定ノ場所ニ於テ職務ヲ行ハシムルコトヲ得
第百四條 訴訟審問ノ上席及指揮ハ合議裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シ
タル裁判長ニ屬シ區裁判所ニ於テハ開廷ヲ爲シタル判事ニ屬ス
裁判長ニ屬スル權ハ裁判上一人ニテ職務スル判事ニモ亦屬ス

第百五條 裁判所ニ於テ對審ノ公開ヲ停ムルノ決議ヲ爲シタルトキ
ハ其決議ハ其ノ理由ト共ニ公衆ヲ退カシムル前之ヲ言渡ニ此ノ場
合ニ於テ裁判所ノ判決ヲ言渡ストキハ再ヒ公衆ヲ入廷セシムヘシ
第百六條 裁判長ハ公開ヲ停メタルトキモ入廷ノ特許ヲ與フルコト
ヲ至當ト認ムル者ヲ入廷セシムルノ權ヲ有ス

第百七條 裁判長ハ婦女兒童及相當ナル衣服ヲ著セサル者ヲ法廷ヨ
リ退カシムルコトヲ得其ノ理由ハ之ヲ訴訟ノ記録ニ記入ス

第一百八條 開廷中秩序ノ維持ハ裁判長ニ屬ス

第一百九條 裁判長ハ審問ヲ妨クル者又ハ不當ノ行狀ヲ爲ス者ヲ法廷ヨリ退カシムルノ權ヲ有ス

前項ニ掲ケタル違犯者ノ行狀ニ因リ之ヲ勾引シ閉廷ノ時マテ之ヲ勾留スルノ必要アリト認ムルトキ裁判長ハ之ヲ命令スルノ權ヲ有ス閉廷ノトキ裁判所ハ之ヲ釋放スルコトヲ命シ又ハ五圓以下ノ罰金若ハ五日以内ノ拘留ニ處スルコトヲ得

此ノ處置ニ對シテハ上告ヲ許シ控訴ヲ許サス且其ノ所爲ノ輕罪若ハ重罪ニ該ルヘキモノナルトキハ之ニ對シテ刑事訴追ヲ爲スコトヲ得

第一百十條 前條ノ規程ハ左ノ變更ヲ以テ當事者証人及鑑定人ニモ亦之ヲ適用ス

第一 裁判所ハ閉廷ヲ待タスシテ本條ノ違犯者ヲ即時ニ罰スルコ

トヲ得

第二 違犯者原告ナルトキハ裁判所ハ處罰ノ上仍本人宥恕ヲ請フカ又ハ恭順ヲ表シテ不敬ノ罪ヲ謝スルマテ其ノ審問ヲ中止スルコトヲ得

第一百十一條 裁判長ハ不當ノ言語ヲ用キル辯護士ニ對シ同事件ニ付引續キ陳述スルノ權ヲ行フコトヲ禁スルコトヲ得其ノ禁止ハ此ノ行狀ニ付懲戒上ノ訴追ヲ爲スコトヲ妨ケス

第一百十二條 裁判所ノ開廷中秩序ヲ維持スル爲第百九條第百十條及第百十一條ヲ以テ與ヘタル權ハ豫審判事又ハ受命判事又ハ法律ニ從ヒ其ノ職務ヲ行フ試補モ亦之ヲ行フコトヲ得

此ノ場合ニ於テノ異議ハ二十四時以内ニ其ノ判事又ハ試補ニ之ヲ申出ルコトヲ得

豫審判事又ハ其ノ命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テ

ハ其ノ判事ノ属スル裁判所ノ刑事部若ハ刑事支部ニ於テ前項ノ異議ヲ裁判ス受命判事又ハ其命ヲ受ケタル試補ノ命令ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ判事ニ命シタル裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

第百十三條 第百九條第百十條第百十一條及第百十二條ヲ以テ與ヘタル權ヲ行ヒタルトキハ訴訟ノ記録ニ之ヲ記入シ及其ノ理由ヲ記ス

前項ノ場合ニ於テ其ノ所爲ノ重罪若ハ輕罪ニ該ルヘキモノナルカ又ハ懲戒上罰スヘキモノナルトキハ詳細ニ之ヲ記入シ裁判長ハ其ノ事件ヲ更ニ處分スルノ權アル官廳ニ報告ヲ爲ス

第百十四條 判事檢事又裁判所書記ハ公開シタル法廷ニ於テハ一定ノ制服ヲ着ス(明治廿三年勅令第二百六十號ヲ以テ判事檢事裁判書記ノ服制ヲ定ム)
前項ノ開廷ニ於テ審問ニ參與スル辯護士モ亦一定ノ職服ヲ着スルコトヲ要ス

第二章 裁判所ノ用語

第百十五條 裁判所ニ於テハ日本語ヲ用ウ

當事者証人又ハ鑑定人ノ中日本語ニ通セサル者アルトキハ訴訟法又ハ特別法ニ通事ヲ用キルコトヲ要スル場合ニ於テ之ヲ用ウ

第百十六條 通事ノ任命及使用並ニ訴訟手續上其ノ行フヘキ職務ニ關ル規則ハ司法大臣之ヲ定ム

第百十七條 通事ノ得難キ場合ニ於テ書記其ノ言語ニ通スルトキハ裁判長ノ承諾ヲ得テ通事ニ用井ラル、コトヲ得

第百十八條 外國人ノ當事者タル訴訟ニ關係ヲ有スル者及其ノ訴訟ノ審問ニ參與スル官吏ノ或ル外國語ニ通スル場合ニ於テ裁判長便利ト認ムルトキハ其ノ外國語ヲ以テ口頭審問ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ審問ノ公正記録ハ日本語ヲ以テ之ヲ作ル

第三章 裁判ノ評議及言渡

第一百十九條 合議裁判所ノ裁判ハ此ノ法律ニ從ヒ定數ノ判事之ヲ評議シ及之ヲ言渡ス

第二十條 四日以上引續クヘキ見込アル刑事ノ審問ニ於テ裁判所長ハ補充判事一人ヲ命シ之ニ立會ハシムルコトヲ得此ノ補充判事ハ其ノ審問中或ル判事ノ他ノ疾病其ノ事故ニ因リ引續キ參與スルコトヲ得サル場合ニ於テ之ニ代リ審問及裁判ヲ完結スルノ權ヲ有ス

第二十一條 判事ノ評議ハ之ヲ公行セス但シ豫備判事及試補ノ傍聽ヲ許スコトヲ得

判事ノ評議ハ其ノ裁判長之ヲ開キ且之ヲ整理ス其ノ評議ノ顛末並ニ各判事ノ意見及多少ノ數ニ付テハ嚴ニ秘密ヲ守ルコトヲ要ス

第二十二條 評議ノ際各判事意見ヲ述フルノ順序ハ官等ノ最モ低キ者ヲ始トシ裁判長ヲ終トス官等同キトキハ年少ノ者ヲ始トシ受命ノ事件ニ付テハ受命判事ヲ始トス

第二十三條 裁判ハ過半數ノ意見ニ依ル

金額ニ付裁判ノ意見三說以上ニ分レ其ノ說各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ最多額ノ意見ヨリ順次寡額ニ合算ス

刑事ニ付其ノ意見三說以上ニ分レ各過半數ニ至ラサルトキハ過半數ニ至ルマテ被告人ニ不利ナル意見ヨリ順次利益ナル意見ニ合算ス

第二十四條 判事ハ裁判スヘキ問題ニ付自己ノ意見ヲ表スルコトヲ拒ムコトヲ得ス

第四章 裁判所及檢事局ノ事務章程

第二十五條 裁判所及檢事局ノ標準ト爲スヘキ規則ハ司法大臣之ヲ定ム

控訴院長及檢事長ハ前項ノ規則ニ依リ各自管轄區域内ノ裁判所及檢事局ニ對シテ事務ノ一般ノ取扱ニ關リ成ルヘク統一ヲ旨トシ殊

ニ裁判所及検事局ノ開庭時間及開廷ノ時日ニ付訓令ヲ發ス
大審院ハ自ラ其ノ事務章程ヲ定ム但シ之ヲ實施スル前司法大臣ノ
認可ヲ受ク

第五章 司法年度及休暇

第二百二十六條 司法年度ハ一月一日ニ始マリ十二月三十一日ニ終ハ
ル

第二百二十七條 裁判所ノ休暇ハ七月十一日ニ始マリ九月十日ニ終ハ
ル

第二百二十八條 休暇中ハ左ノ事件ノ外既ニ著手シタル民事訴訟ヲ中
止ス且新ナル訴訟ニ着手セス

- 第一 爲替手形若ハ約束手形其ノ他ノ流通証券ニ關ル請求
- 第二 船舶又ハ運送貨又ハ積荷ニ對スル請求
- 第三 財産差押事件

第四 住家其ノ他ノ建物又ハ其ノ或ル部分ノ受取明渡使用占據
若ハ修繕ニ關リ又ハ賃借人ノ家具若ハ所持品ヲ賃借人ノ差押
ヘタルコトニ關リ賃借人ト賃借人トノ間ニ起リタル訴訟

第五 養料ノ請求

第六 保証ヲ出サシムルノ請求

第七 取掛リタル建築ノ繼續ニ關ル事件

第八 前數項ニ掲ケタルモノヲ除ク外區裁判所ノ判事ニ於テ又
ハ民事訴訟法ノ定ムル所ニ從ヒ休暇部若ハ休暇部長ニ於テ直
ニ着手スヘキ緊急ノモノト認メタル請求若ハ事件

第二百二十九條 休暇中ニ拘ラス刑事訴訟非訟事件判決執行破産事件
並ニ民事訴訟法ニ依リ略式ヲ以テ取扱フコトヲ得ヘキ訴訟ハ之ヲ
停止スルコトナシ

第三十條 合議裁判所ニ於テハ休暇中事務取扱ノ爲休暇部ト稱ス

ル一若ハ二以上ノ部ヲ設ク
休暇ノ組立ハ休暇ノ始マル前裁判所長之ヲ定ム第二十三條ハ此ノ部ニモ亦之ヲ適用ス
二人以上ノ判事ヲ置キタル區裁判所ノ休暇事務取扱方法ハ監督判事之ヲ定ム

第六章 法律上ノ共助

第三十一條 裁判所ハ訴訟法又ハ特別法ノ定ムル所ニ依リ互ニ法律上ノ補助ヲ爲ス

法律上ノ補助ハ別ニ法律ニ定メタル場合ノ外ハ所要ノ事務ヲ取扱フヘキ地ノ區裁判所ニ於テ之ヲ爲ス

第三十二條 檢事局モ亦各自ノ管轄區域内ニ於テ取扱フヘキ事務ニ付互ニ法律上ノ補助ヲ爲ス

第三十三條 裁判所書記課モ亦其ノ權内ノ事件又ハ其ノ配下ノ執

達吏ノ權内ノ事件ニ付互ニ法律上ノ補助ヲ爲ス

第四編 司法行政ノ職務及監督權

第三十四條 合議裁判所長區裁判所ノ判事若ハ監督裁判檢事總長
檢事長檢事正ハ司法大臣ノ由テ司法行政ノ職務ヲ行フノ官吏トス
第三十五條 司法行政監督權ノ施行ハ左ノ規程ニ依ル

第一 司法大臣ハ各裁判所及各檢事局ヲ監督ス

第二 大審院長ハ大審院ヲ監督ス

第三 控訴院長ハ其ノ控訴院及其ノ管轄區域内ノ下級裁判所ヲ監督ス

第四 地方裁判所長ハ其ノ控訴院及其ノ管轄區域内ノ下級裁判所ヲ監督ス

第五 區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ其ノ裁判所所屬ノ書記及執達吏ヲ監督ス

第六 検事総長ハ其ノ検事局及下級検事局ヲ監督ス

第七 検事長ハ其ノ検事局及其ノ局ノ附置セラレタル控訴院管轄区域内ノ検事局ヲ監督ス

第八 検事正ハ其ノ検事局及其ノ局ノ附置セラレタル地方裁判所管轄区域内ノ検事局ヲ監督ス

第三百三十六條 前條ニ掲ケタル監督權ハ左ノ事項ヲ包含ス

第一 官吏不適當又ハ不充分ニ取扱ヒタル事務ニ付其ノ注意ヲ促シ並ニ適當ニ其ノ事務ヲ取扱フコトヲ之ニ訓令スル事

第二 官吏ノ職務上ト否トニ拘ラス其ノ地位ニ不相應ナル行狀ニ付之ニ諭告スル事

但シ此ノ諭告ヲ爲ス前其ノ官吏ヲシテ辯明ヲ爲スコトヲ得セシムヘシ

第三百三十七條 第十八條及第八十四條ニ掲ケタル官吏ハ第三百三十五

條ニ依リ行フヘキ監督ヲ受クルノ官吏中ニ之ヲ包含ス

第三百三十八條 裁判所若ハ検事局ノ官吏ニシテ適當ニ其ノ職務ヲ行ハサル者又ハ其ノ行狀其ノ地位ニ不相應ナル者ニ付第三百三十六條ヲ適用スルコト能ハサルトキハ懲戒法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第三百三十九條 前數條ニ掲ケタル司法行政ノ職務及監督權ハ判事若ハ検事其ノ官吏タルノ資格又ハ其ノ他ノ資格ヲ以テ爲シタル事ニ對シテ起リタル請求ニ付其ノ請求ヲ満足セシムル爲之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四百十條 司法事務取扱ノ方法ニ對スル抗告殊ニ或ル事務取扱方ニ對シ又ハ取扱ノ延滞若ハ拒絕ニ對スル被告ハ此ノ編ニ掲ケタル司法行政ノ職務及監督權ニ依リ之ヲ處分ス

第四百十一條 裁判所及検事局ハ司法大臣又ハ監督權アル判事若ハ検事ノ要求アル時ハ法律上ノ事項又ハ司法行政法ニ關ル事項ニ付

意見ヲ述フ

第四百十二條 司法官廳ニ對シテ起リタル民事ノ訴訟ニ於テハ其ノ訴訟ヲ受ケタル裁判所ノ檢事局ハ司法官廳ヲ代表ス

第四百十三條 此ノ編ニ掲ケタル前各條ノ規程ハ裁判上執務スル判事ノ裁判權ニ影響ヲ及ホシ又ハ之ヲ制限スルコトナシ

附 則

第四百十四條 此ノ法律ノ施行ニ關ル規程竝ニ從來ノ法律ニシテ此ノ法律ニ牴觸スト雖モ當分ノ内仍ホ効力ヲ有セシムルモノハ別ニ法律ヲ以テ之ヲ定ム

○裁判所構成法施行條例(明治廿三年三月法律第二十二號)

朕裁判所構成法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

裁判所構成法施行條例

第一條 從來ノ治安裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル區裁判所トシ

從來ノ始審裁判所ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所トシ又從來ノ控訴院大審院ハ裁判所構成法ニ定メタル控訴院大審院トス

第二條 始審裁判所從來ノ檢事局ハ裁判所構成法ニ定メタル地方裁判所ノ檢事局トス控訴院大審院ノ檢事局モ亦同シ

第三條 區裁判所ノ管轄區域ヲ爲ス町村ノ變更ハ之ヲ區裁判所管轄區域ニ及ホスモノトス

第四條 裁判所構成法實施前他ノ裁判所第一審トシテ受理シタル民事訴訟及刑事訴訟ニシテ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬シタルモノハ現在ノ儘相當ノ區裁判所ニ移シタルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ區裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第五條 裁判所構成法ニ依リ地方裁判所ノ第二審ニ屬スヘキモ既ニ控訴院ニ於テ受理シタル事件ハ控訴院之ヲ裁判スヘシ又控訴院ノ管轄ニ屬スヘキモ既ニ大審院ニ於テ受理シタル民事刑事ノ上告ハ

大審院之ヲ裁判スヘシ

第六條 裁判所構成法實施前重罪裁判所ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ地方裁判所ニ移ルモノトス既ニ爲シタル裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第七條 裁判所構成法實施前始審裁判所ニ於テ受理シタル郡長區長戸長又ハ市長町長村長ニ對スル民事訴訟ハ同法ニ依リ區裁判所ノ管轄ニ屬スヘキモノト雖其ノ地方裁判所之ヲ裁判シ控訴院ニ於テ受理シタル官廳ニ對スル民事訴訟ハ其ノ控訴院之ヲ裁判スヘシ

第八條 裁判所構成法實施前高等法院ニ於テ受理シタル刑事訴訟ハ現在ノ儘相當ノ裁判所ニ移ルモノトス高等法院ニ於テ裁判スヘキ事件ヲ通常裁判所ニ於テ受理シタルモノモ亦同シ

第九條 明治十八年第三十一號布告違警罪即決例ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十條 ^(ロ) 明治十八年第十二號布告普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法

交渉ノ件處分法ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十一條 明治二十一年勅令第六十四號ハ仍効力ヲ有ス

區裁判所出張所ニ於テ判事差支アルトキハ裁判所書記ヲシテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

北海道及島嶼ニシテ區裁判所遠隔ノ地方ニ於テ司法大臣ハ郡長町長又ハ村長ニ委任シテ登記事務ヲ取扱ハシムルコトヲ得

第十二條 東京地方裁判所管内小笠原嶋及伊豆七嶋ニ於テ民事刑事ノ訴訟ニシテ區裁判所裁判權ニ屬スルモノ及非訟事件ハ裁判所設置マテ之ヲ取扱フ但シ刑事訴訟手續ハ便宜之ヲ取扱フコトヲ得

第十三條 沖繩縣ニ於テ民事刑事ノ訴訟及非訟事件ニシテ區裁判所及地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル者ハ裁判所設置マテ同縣官吏之ヲ取扱フ但シ控訴院ノ裁判權ニ屬スル者ハ長崎控訴院ノ管轄トス

第十四條 樺戸空知釧路ノ集治監ノ囚人罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ノ裁判ニ關ル^(三) 明治十五年第十六號第四十一號及明治十八年第四十二號布告ハ仍効力ヲ有ス

前項ノ裁判ハ地方裁判所之ヲ爲シタルモノト看做ス

第十五條 ^(ホ) 明治二十一年勅令第七十一號清國並ニ朝鮮國駐在領事裁判規則ハ裁判所構成法ノ爲ニ變更ヲ受クルコトナシ

第十六條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官ハ同法第二編第一章ノ要件ヲ必要トセス

第十七條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ書記ハ同法第二編第四章第八十九條ノ要件ヲ必要トセス

第十八條 裁判所構成法實施後三年間ハ司法大臣ハ試補實地修習ノ時間ヲ一年六箇月マテハ減縮スルコトヲ得

明治十七年太政官達第百二號判事登用規則及明治二十年勅令第三

十七號文官試験試補及見習規則ニ依リ試補ト爲リタル者ハ第二回試験ヲ要セスシテ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第十九條 裁判所構成法實施後一年間ハ司法大臣ハ同法第二編第二章第六十九條及第七十條ノ規程ニ拘ラス補職ヲ爲スコトヲ得

第二十條 三年以上裁判官又ハ檢察官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上舊參事院議官又ハ議官補ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上法制局參事官ノ職ヲ奉シタル者又ハ三年以上司法省高等官(會計局ノ高等官ヲ除ク)ノ職ヲ奉シタル者ハ裁判所構成法實施後一年間ハ之ヲ判事又ハ檢事ニ任スルコトヲ得

第二十一條 裁判所構成法第二編第二章第七十四條及第七十五條ハ檢事ニモ亦之ヲ適用ス

(イ)○明治十八年第三拾一號布告

明治十四年九月第四拾四號布告及ヒ同年十二月第八拾號布告ヲ廢止シ違

警罪即決例別紙ノ通制定ス

違警罪即決例

第一條 警察署長及ヒ分署長又ハ其代理タル官吏ハ其管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ即決スヘシ但私訴ハ此限ニ在ラス

第二條 即決ハ裁判ノ正式ヲ用ヒス被告人ノ陳述ヲ聽キ證憑ヲ取調ヘ直チニ其言渡ヲ爲スヘシ

又被告人ヲ呼出スコトナク若クハ呼出シタリト雖モ出廷セサル時ハ直チニ其言渡書ヲ本人又ハ其住所ニ送達スルコトヲ得

第三條 即決ノ言渡ニ對シテハ違警罪裁判所ニ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得但正式ノ裁判ヲ經スシテ直チニ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第四條 即決ノ言渡ニハ被告人ノ氏名年齢身分職業住所犯罪ノ場所年月日時罪名刑名及ヒ正式ノ裁判ヲ請求スルコトヲ得ヘキ期限並ニ其言渡ヲ爲シタル警察署年月日警察官ノ氏名ヲ記載スヘシ

第五條 正式ノ裁判ヲ請求スル者ハ即決ノ言渡ヲ爲シタル警察署ニ

申立書ヲ差出スヘシ但其期限ハ第二條第一項ノ場合ニ於テハ言渡アリタルヨリ三日内第二項ノ場合ニ於テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ五日内トス

第六條 警察署ニ於テ前條ノ申立ヲ受ケタル時ハ二十四時内ニ訴訟ニ關スル一切ノ書類ヲ違警罪裁判所檢察官ニ送致スヘシ

第七條 第五條ニ定メタル期限内ニ正式ノ裁判ヲ請求セサル時ハ即決ノ言渡ヲ以テ確定ノモノトス

第八條 科料拘留ノ言渡ヲ爲シタル時必要ト認ムル場合ニ於テハ後ノ數條ニ定メタル處分ヲ爲スコトヲ得

第九條 科料ノ言渡ヲ爲シタル時ハ其金額ヲ假納セシムヘシ若シ納メサル者ハ一圓ヲ一日ニ折算シテ之ヲ留置ス其一圓ニ滿サル者ト雖モ仍ホ一日ニ計算ス

第十條 拘留ノ言渡ヲ爲シタル時ハ一日ヲ一圓ニ折算シ其刑期ニ相當ノ金額ヲ保證トシテ差出サシムヘシ若シ差出サ、ル者ハ第五條ノ定メタル期限内之ヲ留置ス但刑期五日内ナル時ハ其日數ニ過クルコトヲ得ス

第十一條 保證金ヲ差出シタル者ハ刑ノ言渡確定シタル後直チニ出延シテ其執行ヲ受クヘシ若シ出延セサル時ハ保證金ヲ没入シ本刑ニ換フ

第十二條 留置シタル者正式ノ裁判ヲ請求シ因テ呼出狀ノ送達アリタル時ハ直チニ留置ヲ解クヘシ

第十三條 留置ノ日數ハ一日ヲ一圓ニ折算シテ科料ノ金額ニ算入シ又ハ拘留ノ刑期ニ算入スヘシ

（ロ）○明治十八年第拾貳號布告

普通治罪法陸軍治罪法海軍治罪法交渉ノ件處分法左ノ通制定ス但從

前ノ成規中本則ニ牴觸スルモノハ當分施行セス

第一條 常人ニシテ陸軍刑法若クハ海軍刑法ノ罪ヲ犯シタル者ハ普通裁判所ニ於テ之ヲ審判ス但刑ノ執行ハ普通ノ規則ニ從フ

第二條 軍人常人共ニ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ軍人ハ軍法會議ノ判決ニ付シ常人ハ普通裁判所ノ公判ニ付ス軍衙ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ常人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ管轄ノ普通裁判所檢事ニ送致シ普通裁判所ニ於テ共犯人ヲ逮捕シタルトキハ軍人ハ審問ノ上證憑書類ト共ニ之ヲ被告人ノ所屬長若クハ陸海軍檢査官ニ送致スヘシ

第三條 敵前軍中臨戰合圍ノ地若クハ海軍諸用ニ供スル船舶ニ在テ重罪輕罪ヲ犯シタルトキハ常人ト雖モ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スルコトヲ得但戒嚴令第十一條第十二條ニ掲クルモノハ軍法會議ニ於テ之ヲ審判スヘシ

第四條 軍法會議ト普通裁判所トノ管轄違ニ付テハ軍法會議又ハ普通裁判所ノ言渡ニ對シテ普通治罪法ニ定メタル手續ニ從ヒ大審院ニ上告スルコトヲ得但軍法會議ノ言渡ニ對シ上告スルハ被告人ニ限ルヘシ

第五條 多衆ノ軍人常人圍毆殺傷其他疑獄ニ係ル罪ヲ犯シタルトキハ軍官法司法會同審問スルコトヲ得

第六條 軍法會議ト普通裁判所トヲ問ハス既ニ確定シタル裁判ノ効力ハ互ニ之ヲ侵スコトヲ得ス

(ハ) ○明治二十一年勅令第六十四號
朕治安裁判所出張所設置ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム
治安裁判所出張所ヲ置キ登記事務並期日ヲ定メ裁判事務ヲ取扱ハシム其位置及ヒ管轄區域ハ司法大臣之ヲ定ム
(ニ) ○明治十五年第十六號布告

樺戶集治監ノ囚人假出獄免幽罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ(明治十八年第三十三號布告ヲ以テ但書消滅)

(三) ○明治十五年第四十一號布告
空知集治監ノ囚人假出獄免幽罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ(明治十八年第三十三號布告ヲ以テ但書消滅)

(三) ○明治十八年第四拾貳號布告
釧路集治監ノ囚人假出獄免幽罪ヲ犯シ輕罪以下ニ該ル者ハ司獄官吏ニ於テ裁判シ治罪ノ手續モ便宜取計フヘシ
但重罪ハ根室重罪裁判所ノ管轄ニ屬ス

(ホ) ○明治二十一年勅令第七十一號

朕清國並朝鮮國駐在領事裁判規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

清國並朝鮮國駐在領事裁判規則

第一條 清國並朝鮮國駐在ノ日本帝國領事ハ其管轄内ニ在ル日本人

民ニ對スル民事訴訟及ヒ公訴私訴ニシテ治安裁判違所警罪裁判所
始審裁判所輕罪裁判所ノ權限ニ屬スルモノヲ審判スルノ權ヲ有ス
但治安裁判所違警罪裁判所ノ權限ニ屬スル訴件ニ付領事ノ爲シタ
ル裁判ハ終審ノ裁判ナリトス

第二條 豫審裁判ノ職務ハ領事之ヲ行ヒ檢察官ノ職務ハ副領事警察
官若クハ領事館書記生之ヲ行フ

第三條 裁判所書記ノ職務ハ領事館書記生若クハ其他ノ館員之ヲ行
フ

第四條 輕罪ニ付テハ豫審ヲ爲サ、ルモノトス

第五條 重罪ニ關スル豫審ノ手續及ヒ豫審終結ノ言渡ニ付故障ヲ爲
スコトヲ許サル但豫審終結ノ言渡ニ對シテハ直ニ上告ヲ爲スコト
ヲ得

第六條 治罪法ニ定ムル忌避回避ノ規則ハ之ヲ適用セス

第七條 民事訴訟及ヒ公訴私訴ノ裁判ニ對スル控訴ハ長崎控訴院重
罪ニ係ル公訴ハ長崎重罪裁判所ノ管轄トス

第八條 民事訟及ヒ私訴ノ裁判ニ對スル控訴上告ハ本人若クハ代官
人ノ出廷ヲ要セス書面ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得禁錮ノ言渡ヲ除ク
ノ外公訴ノ裁判ニ對スル控訴モ亦同シ

第九條 此規則ニ於テ領事ト稱スルハ總領事領事又ハ其代理及ヒ委
任狀ヲ有シタル副領事又ハ其代理ヲ云フ

○執達吏規則（明治廿三年七月
法律第五十一號）

朕執達吏規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月
一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏規則

- 第一條 執達吏ハ區裁判所ニ屬シ法律ニ從ヒ訴訟ニ關スル書類ヲ送達シ及裁判ヲ執行スルモノトス
- 第二條 執達吏ハ當事者ノ委任ニ依リ左ノ事務ヲ取扱フコトヲ得
 - 第一 告知及催告ヲ爲スコト
 - 第二 動産不動産ノ任意競賣ヲ爲スコト
 - 第三 拒證書ヲ作ルコト
- 第三條 執達吏ハ法律規則ニ定メタル職務ノ外裁判所檢事局ノ命令ニ依リ其職務ニ應スル事務殊ニ左ノ事務ヲ取扱フノ義務アリ
 - 第一 書類物品ノ送付ヲ爲スコト
 - 第二 罰金科料過料ヲ徵收シ及沒收物品ヲ取上ケ若クハ賣却スルコト

第三 令狀ノ執行ヲ爲スコト

第四條 執達吏ハ所屬區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ノ監督ヲ受ク他ノ判事又ハ檢事ニシテ職務上事務ヲ命シタルトキハ其事務ニ限リ執達吏ニ對シ監督權ヲ有ス

第五條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ住居ヲ定ムヘシ但地方裁判所長ノ許可ヲ得タルトキハ其區裁判所管轄内ニ限リ他ノ地ニ住居ヲ定ムルコトヲ得

第六條 執達吏ハ所屬區裁判所所在地ニ役場ヲ設クヘシ

第七條 一區裁判所ニ數名ノ執達吏アルトキハ裁判所及檢事局ノ命令ニ依ル事務ト裁判所書記ヲ經テ委任スヘキ事務トヲ各執達吏ニ分配スヘシ此分配ハ成ルヘク土地ノ區域ニ從フヘシ
事務分配ハ毎司法年度ノ終ニ於テ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事前以テ之ヲ定ム

執達吏ノ爲シタル事務ハ事務分配上其事務他ノ執達吏ニ屬シタリトノ事實ノミニ因リ其効力ヲ失フコトナシ

第八條 執達吏ハ左ノ場合ニ於テハ其職務ノ施行ヨリ除斥セララルヘシ

第一 自己又ハ其婦カ當事者若クハ被害者タルトキ又ハ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者ト共同權利者共同義務者若クハ償還義務者タルノ關係ヲ有スルトキ

第二 自己又ハ其婦カ當事者ノ一方若クハ雙方又ハ被害者又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第三 自己カ同一ノ事件ニ付證人若クハ鑑定人ト爲リテ訊問ヲ受クルトキ又ハ法律上代理人ト爲ルノ權利ヲ有スルトキ若クハ之ヲ有セタルトキ

第九條 執達吏ハ民事訴訟ニ付テ夫婦又ハ自己若クハ其婦ノ親族ノ爲ニノミ訴訟代理人及輔佐人トシテ法廷ニ出ルコトヲ得但姻族コ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖亦同シ

第十條 執達吏ハ其職務ヲ行フヘキ命令若クハ委任ヲ受クルトキハ正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムコトヲ得ス

第十一條 執達吏ハ特別ノ命令若クハ委任ヲ受ケタル場合ノ外自己ノ責任ヲ以テ左ニ掲グル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得

第一 執達吏ノ登用試験ニ及第シタル者
第二 執達吏ノ職務修習者ニシテ三箇月以上其職務ヲ修習シタル者

第三 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第四 區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ於テ臨時執達吏ノ

職務ヲ行フニ適當ト認メタル者

第十二條 執達吏正當ノ理由アリテ其職務ヲ行フコトヲ得サルトキ又ハ之ヲ委任スルコトヲ得サルトキハ命令ヲ爲シタル裁判所及檢事局又ハ委任ヲ爲シタル本人ニ速ニ其旨ヲ通知スヘシ
委任ヲ爲シタル本人ニ通知スルコト能ハサルトキ又ハ急速ノ處分ヲ要スルトキハ其旨ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ニ申立ツヘシ

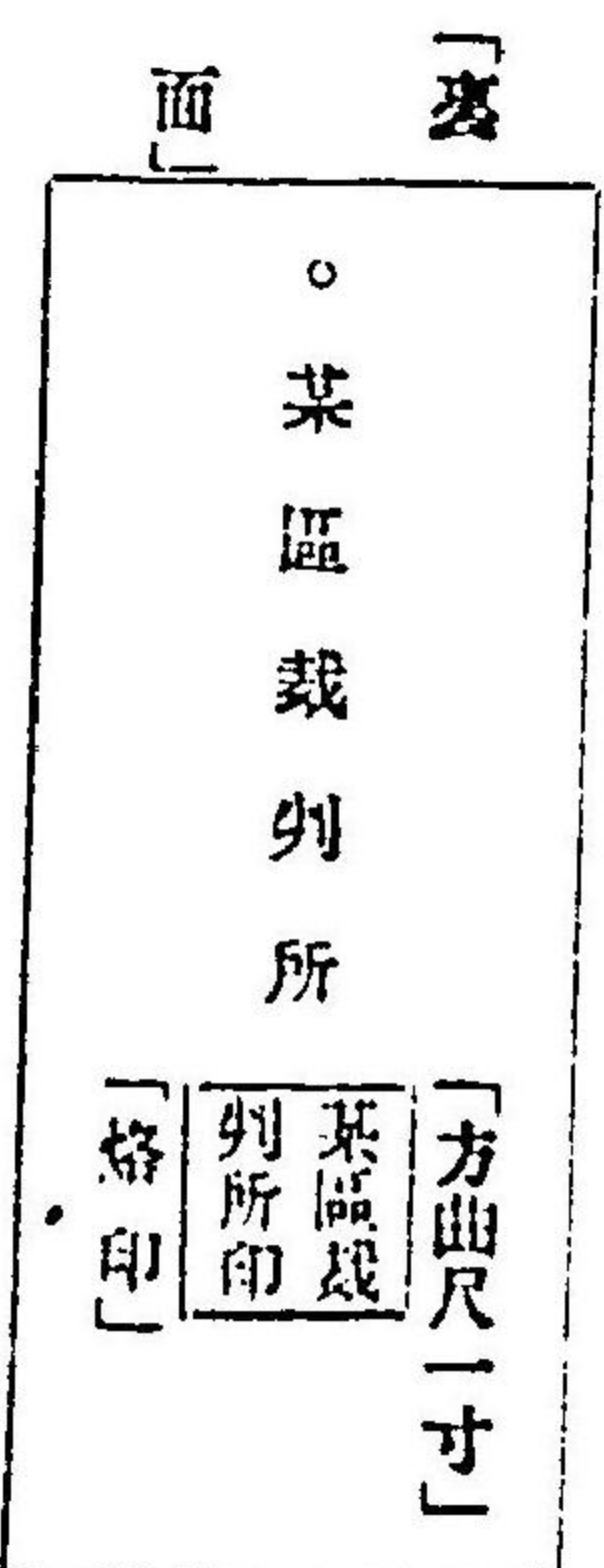
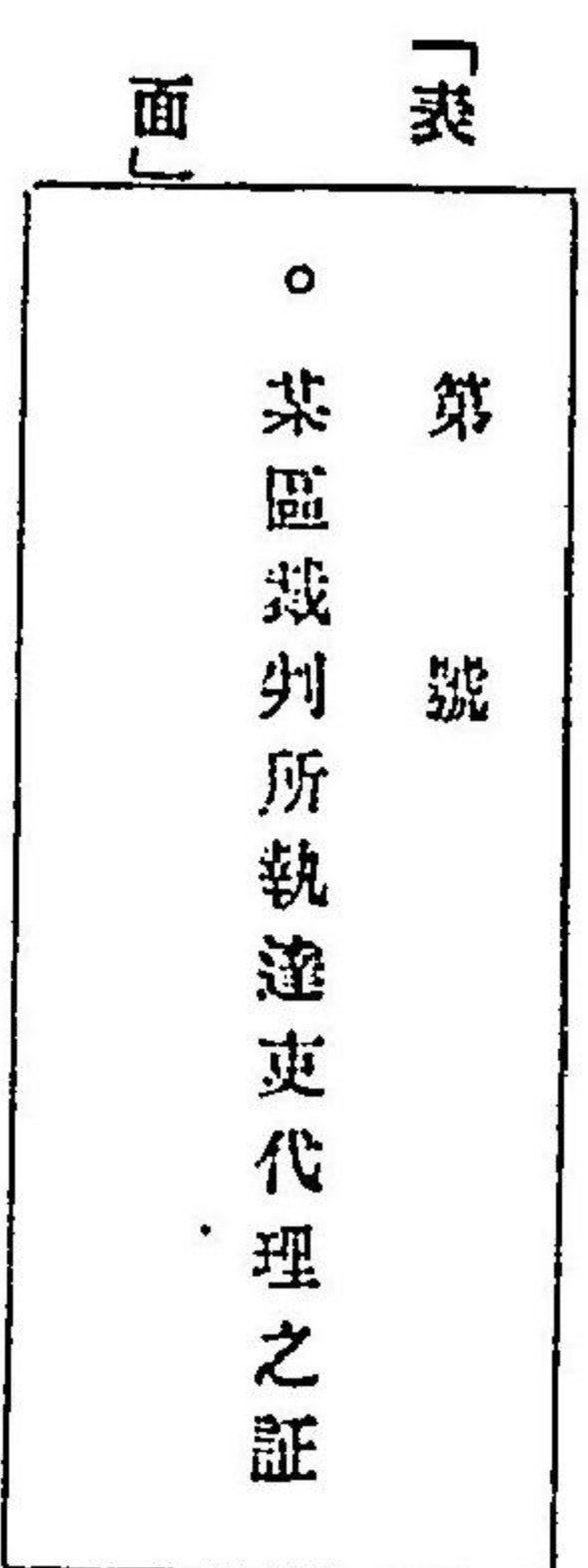
第十三條 前條ノ場合其他執達吏差支アルトキハ區裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ第十一條ニ掲クル者ニ執達吏ノ職務ヲ行ハシムルコトヲ得

第十四條 執達吏ハ一定ノ制服ヲ著スヘシ(明治廿三年勅令第二百六十號ヲ以テ執達吏ノ制服ヲ定ム)
臨時職務執行ノ委任ヲ受ケタル者ハ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ヲ携帯スヘシ

(參照)明治廿三年九月司法省訓令第三號(裁判所)

執達吏規則第十四條ニ依リ區裁判所ヨリ交付スヘキ鑑札ハ左ノ通り調製スヘシ

(一) 内及印章ハ朱



木製ニシテ堅曲尺三寸幅曲尺一寸五分厚サ適宜
每札番號ヲ付シ交付ノ時々番號又年月日氏名ヲ帳簿ニ登錄シ置クヘシ
廳印ハ烙印ニシテ方曲尺一寸タルヘシ

第十五條 執達吏ハ裁判所書記ヲ經タルト否トヲ問ハス委任ヲ受ケ職務ヲ行フニ付テハ定規ノ手数料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ケ
執達吏ハ定規ノ手数料ヲ増減シ又ハ手数料及立替金ノ外報酬ヲ受クルコトヲ得ス

第十六條 執達吏第三條ニ掲クル職務ヲ行フニ付テハ立替金ノ外手
數料ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條 執達吏第十一條ノ場合ニ於テ臨時職務執行ノ委任ヲ爲シ
タルトキハ其委任ヲ受ケタル者ニ報酬トシテ手數料十分ノ三以上
ヲ支給スヘシ

第十八條 第十三條ノ場合ニ於テ臨時執達吏ノ職務ヲ行ヒタル者ハ
其職務ニ付定メタル手數料ヲ受ケ及立替金ノ辨濟ヲ受ク

第十九條 執達吏一年間ニ收入セシ手數料百八拾圓ニ充タサルトキ
ハ國庫ヨリ其不足額ヲ支給ス

第二十條 執達吏死亡シタルトキ又ハ停職免職若クハ勾留セラレタ
ルトキハ同裁判所ノ一人ノ判事若クハ監督判事ハ左ノ處分ヲ爲ス
ヘシ

第一 官印帳簿其他職務ニ關スル書類ヲ區裁判所ニ差出サシムル

コト

第二 執達吏職務上保管シタル物品及書類ノ保全ニ必要ノ手續ヲ
爲スコト

第二十一條 執達吏ハ官吏恩給法ニ照シ恩給ヲ受ク其恩給年額ハ第
十九條ニ定メタル金額ヲ俸給額ト看做シテ算定ス

第二十二條 執達吏ハ此規則ニ依ルノ外總テ一般官吏ノ例ニ依ル
附則

第二十三條 執達吏ヲ置カサル間ハ區裁判所書記執達吏ノ職務ヲ行
フ此場合ニ於テハ自己ノ責任ヲ以テ第十一條ニ掲クル者又ハ自己
ノ適當ト思量スル者ニ臨時其職務ノ執行ヲ委任スルコトヲ得
裁判所書記前項ノ委任ヲ爲シタルトキハ委任ヲ受ケタル者ニ執達
吏ノ職務ニ付定メタル手數料十分ノ七以上ヲ支給スヘシ

○執達吏手數料規則（明治二十三年七月
法律第五十二號）

裁判所構成法（執達吏手數料規則）

朕執達吏手数料規則ヲ裁可シ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

執達吏手数料規則

第一條 執達吏ハ此規則ニ從ヒ手数料ヲ受ク

第二條 書類送達ノ手数料ハ一通ニ付五錢トス

第三條 有體動産及未タ土地ヨリ離レサル果實並爲替證券其他裏書ヲ以テ移轉スルコトヲ得ル證券ノ差押假差押ニ付テノ手数料ハ左ノ區別ニ從フ

執行スヘキ債權額 手数料

貳拾圓マテ 三拾錢

五拾圓マテ 五拾錢

百圓マテ 七拾五錢

貳百五拾圓マテ 壹圓

五百圓マテ 壹圓貳拾五錢

千圓マテ 壹圓五拾錢

千圓ヲ超ユルトキハ貳圓トス

若シ執務三時間以上ニ涉ルトキハ二時間毎ニ本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ加フ但シ其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

第四條

執達吏差押假差押ヲ爲スヘキ場所ニ臨ムト雖差押ソヘキ物ナキトキ又ハ差押フヘキ物ヲ換價スルモ強制執行ノ費用ヲ償フテ剩餘ヲ得ル見込ナキトキハ前條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第五條 民事訴訟法第五百五十六條第二項(イ) 第五百八十六條第二項(ロ)

第六百十五條ノ場合及既ニ差押假差押ニ著手シタル執達吏ノ死亡若クハ其他ノ理由ニ依リ委任ノ消滅シタルトキ物ヲ換價スル爲其委任ヲ引受ケタル場合ニ於テハ執達吏ハ第三條ニ定メタル手数料

ノ半額ヲ受ク

○参照(民事訴訟法)

(イ)第五百五十六條第二項) 囑託ニ因リ差押ヘタル物ハ債權者ノ委任シタル
執達吏ニ之ヲ交付ス可シ

(ロ)第五百八十六條第二項) 執達吏ハ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書
ノ閲覧ヲ求メテ物ノ照査ヲ爲シ未タ差押ニ係ラサル物アルトキハ之ヲ
差押ヘ既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ差押調書ヲ交付シ且總テノ差押物
ヲ競覽ニ付ス可キコトヲ求ム可シ若シ差押フ可キ物アラサルトキハ照
査調書ヲ作り既ニ差押ヲ爲シタル執達吏ニ之ヲ交付ス可シ

(ハ)第六百十五條 有體動産ノ請求ノ差押ニ付テハ其動産ヲ債權者ノ委任シ
タル執達吏ニ引渡ス可キコトヲ命ス可シ
右動産ノ換價ニ付テハ差押物ノ換價ニ關スル規定ヲ適用ス

第六條 特定ノ動産又ハ代替物ノ一定ノ數量ヲ債權者ヨリ取上ケ之
ヲ債權者ニ引渡ス場合ニ於テハ其手数料ヲ五拾錢トス若シ執務ニ

時間以上ニ渉ルトキハ一時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但シ其執務一時間ニ
滿タサルモ一時間ト看做シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖引渡スヘキ物ナキトキ
ハ前項ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

第七條 民事訴訟法第七百三十一條第一項ノ場合ニ於テハ執務三時
間以内ハ手数料ヲ五拾錢トス若シ其執務三時間以上ニ渉ルトキ一
時間毎ニ拾五錢ヲ加フ但シ其執務一時間ニ滿タサルモ一時間ト看做
シテ算定ス

前項ノ場合ニ於テ執達吏其場所ニ臨ムト雖船舶アラサルトキハ前
項ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク

○参照(民事訴訟法)

第七百三十一條(第一項) 債務者カ不動産又ハ人ノ住居スル船舶ヲ引渡シ
又ハ明渡ス可キトキハ執達吏ハ債務者ノ占有ヲ解キ債權者ニ其占有ヲ

裁判所構成法 (執達吏手数料規則)

得セシム可シ

第八條 民事訴訟法第六百四十三條第三項ニ依リ不動産ノ取調ヲ爲ス場合ニ於テハ第三條ニ定メタル區別ニ從ヒ其手数料ヲ受ク

○參照(民事訴訟法)

第六百四十三條 申立ニハ執行アル正本ノ外左ノ證書ヲ添附ス可シ

第四 建物ニ付テハ國郡市町村、字、番地、構造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付キ納ム可キ一ノ年ノ公課ヲ証ス可キ證書

第五 地所、建物ニ付キ貸貸借アル場合ニ於テハ其期限茲ニ借貸ヲ証ス可キ證書

同條(第三項) 第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ証明スル能ハサルトキハ債權者ハ競賣申立ノ際其取調ヲ執行裁判所ニ申請スルコトヲ得但此場合ニ於テハ裁判所ハ執達吏ヲシテ其取調ヲ爲サシム可シ

第九條 動産不動産及船舶ノ競賣ニ付テノ手数料ハ左ノ區別ニ從フ但競賣ニ依リ得タル金額執行スヘキ債權額ニ超過スルトキハ其債

權額ヲ以テ競賣金額ト看做ス

競賣金額

手数料

貳拾圓マテ

六拾錢

五拾圓マテ

壹圓

百圓マテ

壹圓五拾錢

貳百五十圓マテ

貳圓

五百圓マテ

貳圓五十錢

千圓マテ

四圓

以上千圓毎ニ壹圓ヲ加フ

任意競賣ニ付テモ亦前項ニ同シ

第十條 執達吏執行行爲ヲ爲スヘキ場所ニ臨マサル以前ニ民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ

裁判所構成法（執達吏手数料規則）

各本條ニ定メタル手数料ノ十分ノ三ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ三拾錢トス

第十一條 執達吏執行行為ヲ爲スヘキ場所ニ臨ミタル後民事訴訟法第五百五十條ニ依リ又ハ委任ノ消滅ニ依リ強制執行ヲ止メタルトキ又ハ支拂若クハ引渡ニ依リ強制執行ノ委任終了シタルトキハ各本條ニ定メタル手数料ノ半額ヲ受ク但第九條ノ場合ニ於テハ其手数料ヲ五拾錢トス

○參照（民事訴訟法）

第五百五十條 強制執行ハ左ノ書類ヲ提出シタル場合ニ於テ之ヲ停止シ又ハ之ヲ制限ス可シ

第一 執行ス可キ判決若クハ其假執行ヲ取消ス旨又ハ強制執行ヲ許サストシテ宣言シ若クハ其停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル執行力アル裁判ノ正本

第二 執行又ハ執行處分ノ一時ノ停止ヲ命シタル旨ヲ記載シタル

裁判ノ正本

第三 執行ヲ免カラル爲メ保証ヲ立テ又ハ供託ヲ爲シタル旨ヲ記載シタル公正ノ証明書

第四 執行ス可キ判決ノ後ニ債權者カ辨濟ヲ受ケ又ハ義務履行ノ猶豫ヲ承諾シタル旨ヲ記載シタル証書

第十二條 第三條乃至第十一條ノ手数料ヲ受クヘキ行為ニハ強制執行ノ場合ニ於ケル左ノ行為ヲ包含ス

第一 警察上ノ援助ヲ求メ又ハ證人鑑定人ノ立會ヲ爲サシムルコト

第二 執行行為ニ屬スル催告其他ノ通知ヲ爲シ又ハ書類ノ送達ヲ爲スコト

第三 記名證券ヲ買主ノ氏名ニ書換ヘ及必要ナル陳述ヲ債務者ニ代リ爲スコト

第四 支拂其他ノ給付、差押金、及賣却金ヲ受取リ、交付シ若クハ供託シ又ハ受取證書ヲ交付シ又ハ差押物ヲ還付スルコト

第五 競賣ノ公告ヲ爲スコト

第十三條 執達吏ハ立替金トシテ左ノ費用ノ辨濟ヲ受ク

第一 書記料

第二 郵便料、電信料

第三 公告料

第四 證人、鑑定人ノ手當

第五 職工、役夫ノ手當

第六 有價證券ノ記名書換及流通ヲ止メタル證券ノ流通ヲ回復スル爲ノ費用

第七 人及物ノ送致費用

第八 物ノ保存並監視ノ費用

第九 果實收獲ノ費用

第十 旅費

第十四條 前條ノ書記料ハ左ノ場合ニ於テ之ヲ受ク

第一 法律ニ依リ又ハ利害關係人ノ求ニ依リ證書及記録中ニ存スル書類ノ謄本ヲ作りタルトキ但法律ニ依リ交付スヘキ送達證書ノ謄本ハ此限ニ在ラス

第二 供託ヲ爲スニ際シ執行裁判所ニ差出スヘキ届書ヲ作りタルトキ

第三 差押命令ノ送達後第三債務者ノ爲ス陳述ヲ筆記シタルトキ書記料ハ半枚十二行二十字詰ニ付貳錢五厘トス但十行ニ滿タサルモ半枚ト看做シテ算定ス

第十五條 強制執行ニ關セサル告知及催告ヲ爲ストキハ其手数料拾錢ヲ受ク

第十六條 執達吏拒證書ヲ作リタルトキハ手数料拾錢ヲ受ク
拒者ノ營業場又ハ住居ノ間合ヲ爲シ拒證書ヲ作リタルトキハ手数料貳拾錢ヲ受ク

第十七條 證人ニ支給スヘキ日當ハ貳拾錢以下鑑定人ニ支給スヘキ日當ハ五拾錢以下トシ執達吏土地ノ情況ニ從ヒ之ヲ支給ス若シ一里以上ノ地ヨリ呼出シタルトキハ第十八條ノ規定ニ從ヒ旅費ヲ支給ス

第十八條 執達吏自己ノ役場ヨリ一里以上ノ地ニ至リ職務ヲ行フトキハ一里毎ニ拾錢以下ノ旅費ヲ受ク但一里ニ滿タサルモ一里ト看做シテ算定ス右旅費ノ額ハ控訴院長ノ認可ヲ經テ地方裁判所長之ヲ定ム

第十九條 執達吏ハ總テノ事務ヲ擔任スルニ當リ手数料及立替金ノ概算額ヲ委任者ヨリ豫納セシム若シ豫納セサルトキハ委任ニ應ヒ

サルコトヲ得但裁判所及檢事局ノ命令ニ依ルトキ又ハ訴訟上ノ救助ヲ受ケタル者ノ爲ニ事務ヲ擔任スルトキハ此限ニ在ラス

第二十條 執達吏ハ委任ノ終了シタル後手数料及立替金ノ辨濟ヲ受クヘキモノトス但民事訴訟法第五百五十四條ニ規定シタル場合ハ此限ニ在ラス

○參照（民事訴訟法）

第五百五十四條 強制執行ノ費用ハ必要ナリシ部分ニ限リ債務者ノ負擔ニ歸ス此費用ハ強制執行ヲ受クル請求ト同時ニ之ヲ取立ツ可シ強制執行ノ基本タル判決ヲ廢棄若クハ破毀シタルトキハ其費用ハ之ヲ債務者ニ辨濟ス可シ

第二十一條 執達吏裁判所及檢事局ノ命令ニ依リ其職務ヲ行フ爲ニ要シタル立替金ハ三箇月毎ニ確定シテ之ヲ支給ス
右立替金ハ國庫ヨリ之ヲ支辨ス

第二十二條 訴訟上ノ救助ヲ付與シタル場合ニ於テハ執達吏ノ立替
金ハ國庫ヨリ支辨ス但債務者ヨリ辨濟シ能ハサル場合ニ限ル

第二十三條 執達吏ハ其職務執行ニ付作リタル書類ノ正本又ハ謄本
ニ手數料及立替金ノ額ヲ附記スヘシ又職務時間ニ應シ其辨濟ヲ受
クヘキトキハ調書ニ其職務時間ヲ附記スヘシ若シ之ヲ附記セサル
トキハ最短ノ時間ニ付テ定メタル金額ヲ以テ算定ス

○執達吏登用規則（明治廿三年八月
司法省令第二號）

明治二十三年^ニ法律第六號裁判所構成法第九十五條及第九十九條ニ
依リ執達吏登用規則左ノ通相定ム

執達吏登用規則

第一條 執達吏ニ任セラル、ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 年齢滿二十五歲以上ナルコト

第二 陸海軍ノ現役ヲ終ヘ又ハ之ヲ免セラレタルコト

第三 身體健全ナルコト

第四 家計ノ整理シタルコト

第五 品行方正ナルコト

第六 試験ニ及第シタルコト

第二條 左ニ掲クル者ハ執達吏ニ任セラル、コトヲ得ス

第一 重罪ヲ犯シタル者但國事犯ニシテ復權シタル者ハ此限ニ
非ス

第二 定役ニ服スヘキ輕罪ヲ犯シタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ義務ヲ免カレサル者

第四 懲戒ノ處分ニ由リ免職セラレタル者

第三條 執達吏ノ試験ヲ受ケントスル者ハ少クとも六箇月間區裁判
所ニ於テ主トシテ執達吏ノ職務ヲ修習シ傍ラ書記ノ職務ヲ修習ス
ルコトヲ要ス

職務ノ修習ヲ爲ス者ハ職務上ノ秘密ヲ漏洩スヘカラス

第四條 職務修習ヲ願フニハ願書ニ兵役ニ關ル證書及履歴書ヲ添付シ之ヲ控訴院長ニ差出シ其許可ヲ受クヘシ

第五條 職務修習ノ許可ヲ爲シタルトキハ控訴院長ハ修習者ノ屬スヘキ區裁判所ヲ指定スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ授業ヲ擔當スヘキ執達吏及裁判所書記ヲ選定シ職務ノ訓導ヲ爲サシムヘシ

第六條 控訴院長ハ修習者ノ行狀執達吏トナルニ不適當ナリト認ムルトキハ其修習ヲ止ムルコトヲ得

第七條 職務修習者試験ヲ受ケントスルニハ第一條第一乃至第五ノ諸件ヲ具備シタルコト及第二條ノ諸件ニ觸レサルコトヲ證明シ並修習ノ日數ヲ記入シタル願書ヲ區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ヲ經由シテ控訴院長ニ差出スヘシ

區裁判所ノ一人ノ判事若ハ監督判事ハ前項ノ願書ニ意見ヲ付スヘシ

控訴院長ハ書類ヲ調査シ試験ノ許否ヲ定ムヘシ

第八條 試験ハ地方裁判所ニ於テ毎年一回之ヲ行フ

第九條 試験委員長及試験委員ハ地方裁判所及區裁判所ノ判事檢事ノ中ヨリ試験舉行毎ニ司法大臣之ヲ命ス

第十條 控訴院長ハ試験ヲ受クヘキ修習者ノ名簿ヲ試験委員長ニ送付スヘシ

前項ノ送付アリタルトキハ試験委員長ハ試験期日ヲ定メ之ヲ修習者ニ告知スヘシ

第十一條 試験ハ筆記口述ノ二様トス

口述試験ハ筆記試験ニ及第シタル者ニ之ヲ行フ

第十二條 試験ハ左ノ科目ニ就キ之ヲ行フ

第一 民事訴訟法及治罪法ノ中書類送達及執行ニ關ル規程

第二 執達吏ニ關ル諸規則

第三 算術(加減乗除分數比例)

第四 讀書筆寫

第十三條 筆記試驗問題ノ答案ハ裁判所ノ官吏監督シテ之ヲ作ラシ

試驗委員長ハ受験者ノ申立アルトキハ區裁判所ニ於テ筆記試驗問題ノ答案ヲ作ラシムルコトヲ得

第十四條 受験者ノ及第落第及及第者ノ優劣ハ筆記試験口述試験ノ成績ニ對スル委員過半數ノ意見ニ從テ之ヲ決ス

及第落第ニ付テノ意見數相半スルトキハ落第ト看做スヘシ

第十五條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員長及試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス

第十六條 試験ニ落第シタル者ハ更ニ三箇月以上修習ヲ爲スニ非ザレハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス

第十七條 不正ノ方法ヲ以テ及第ヲ企テタル者ハ再ヒ試験ヲ受クルコトヲ得ス其及第シタル者ハ及第ノ效ナキモノトス

第十八條 試験委員ハ試験ノ問題及成績ヲ記録ニ記載スヘシ

第十九條 試験委員長ハ及第者ノ氏名及其試験成績ヲ控訴院長ニ報告スヘシ

第二十條 左ニ掲クル者ハ試験ヲ要セス執達吏ニ任セラル、コトヲ得

第一 官立府縣立中學校又ハ之ト同等ナル官立府縣立學校司法省舊法學校又ハ帝國大學ノ監督ヲ受ケタル舊私立法學校及文部大臣ノ認可ヲ經タル學則ニ依リ法律學ヲ教授スル私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者

第二 裁判所書記ノ登用試験ニ及第シタル者

第三 判任官以上ノ職ヲ現ニ奉シ又ハ曾テ奉シタル者

第四 陸軍下士ニシテ文官奉職ヲ請願スルコトヲ得ル者

第二十一條 第三條乃至第六條ノ規程ハ前條ニ掲ケタル者ニモ亦之ヲ適用ス

前條第四ニ該ル者ハ職務修習ノ願書ニ修習ヲ爲サントスル區裁判所ヲ記載シ陸軍大臣ヲ經由シテ司法大臣ニ差出スヘシ司法大臣ハ願書ヲ管轄控訴院長ニ送付スヘシ

第二十二條 試験及第者及第二十條ニ掲ケタル者ニシテ職務修習ヲ終リタル者ノ任補ハ執達吏ノ缺員アルヲ待テ控訴院長之ヲ攝行ス

第二十三條 執達吏ニ任セラレタル者ハ任補ノ日ヨリ三十日內ニ保證金ヲ管轄地方裁判所ニ納ムヘシ若シ其期間內ニ保證金ヲ差出サハルトキハ職務ヲ罷免ス

保證金ハ五百圓以下ニ於テ土地ノ情況ニ從ヒ控訴院長之ヲ定ム

保證金ハ相當ノ價格アル公債證書若ハ日本銀行株券ヲ以テ之ニ代ユルコトヲ得

第二十四條 執達吏保證金ヲ納メタルトキハ裁判所ハ官印ヲ交付ス

執達吏ハ官印ノ交付ヲ得タル後ニ非サレハ職務ヲ行フコトヲ得ス

附 則

第二十五條 本則實施ノ際ハ職務修習ヲ要セス試験及任補ヲ行フコトヲ得

○判事懲戒法（明治廿三年八月法律第六十八號）

朕判事懲戒法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

判事懲戒法

第一章 總則

第一條 凡ソ判事ヲ懲戒スルハ左ノ場合ニ於テ懲戒裁判所ノ裁判ヲ

以テスヘシ

- 第一 職務上ノ義務ニ違背シ又ハ職務ヲ怠リタルトキ
- 第二 官職上ノ威嚴又ハ信用ヲ失フヘキ所爲アリタルトキ

第二章 懲罰

第二條 懲罰ハ左ノ如シ

- 第一 譴責
- 第二 減俸
- 第三 轉所
- 第四 停職
- 第五 免職

第三條 前條何レノ懲罰ヲ適用スヘキヤ否ハ所犯ノ輕重ニ從ヒ懲戒裁判所之ヲ定ムヘシ

懲戒裁判所ハ懲罰ノ適用ヲ定ムルニ當リ平生ノ行狀ヲ斟酌スルコ

トヲ得

第四條 減俸ハ一月以上一年以下年俸月割額ノ三分ノ一以内ヲ減ス

第五條 轉所ハ他ノ裁判所若ハ他ノ職ニ轉セシム但シ情狀ニ因リ減俸ヲ併セ科スルコトヲ得

第六條 停職ハ三月以上一年以下職務ノ執行ヲ停止ス

停職中ハ俸給ヲ給セス

第七條 免職ノ言渡ヲ受ケタル者ハ現在ノ官ヲ失ヒ及恩給ヲ受クルノ權ヲ失フ

第三章 懲戒裁判所

第八條 懲戒裁判所ハ各控訴院及大審院ニ之ヲ置ク

第九條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ控訴院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事五人ヲ以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ大審院長ヲ加ヘ其ノ院ノ判事七人ヲ

以テ組立テ院長ヲ以テ長トス

第十條 控訴院長及大審院長ハ毎年部長ト協議シ前以テ懲戒裁判所ノ判事ヲ定メ並ニ裁判所長判事差支アルトキノ代理順序ヲ定ム

第十一條 懲戒裁判所ノ判事ノ忌避回避ニ付テハ治罪法ノ規程ヲ準用ス

第十二條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事長之ヲ行ヒ大審院ニ於ケル懲戒裁判所ノ檢事ノ職務ハ檢事總長之ヲ行フ

第十三條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命シ大審院ニ於ケル懲戒裁判所長ハ其ノ院ノ裁判所書記ノ中ヨリ懲戒裁判所ノ書記ヲ命ス

第十四條 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ハ院長及部長ヲ除ク外其ノ院ノ判事及其ノ管轄區域内ノ總テノ下級裁判所ノ判事ニ對スル懲戒事件ヲ管轄ス

第十五條 大審院ニ於ケル懲戒裁判所ハ左ノ事件ヲ管轄ス

第一 第一審ニシテ終審トシテ大審院ノ判事、控訴院長及控訴院部長ニ對スル懲戒事件

第二 控訴院ニ於ケル懲戒裁判所ノ裁判ニ對スル抗告及控訴

第十六條 懲戒裁判所ノ管轄ハ所犯ノ地ニ拘ラス裁判手續開始ノトキ判事ノ奉職スル裁判所ニ依テ定マルモノトス

第四章 裁判手續

第十七條 懲戒裁判所ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ權職ヲ以テ懲戒裁判ヲ開始スヘキヤ否ヲ決定ス但シ職權ヲ以テスル場合ニ於テハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ

第十八條 檢事ハ裁判手續ノ開始ヲ拒ミタル懲戒裁判所ノ決定ニ對シテハ七日ノ期間内ニ抗告裁判所ニ抗告ヲ爲スコトヲ得

第十九條 抗告裁判所ハ檢事ノ意見ヲ聽キタル後抗告ヲ裁判ス若シ

抗告ヲ正當ナリト認メタルトキハ裁判手續開始ノ決定ヲ爲シ管轄懲戒裁判所ヲシテ其ノ後ノ手續ヲ爲サシムヘシ

第二十條 開始決定ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十二條 懲戒裁判所ニ於テ下調ヲ必要ナリト決定スルトキハ懲戒裁判所長ハ懲戒裁判ヲ開始シタル院ノ判事若ハ管轄區域内ノ地方裁判所ノ判事ニ下調ヲ命スヘシ

第二十三條 下調ノ命ヲ受ケタル判事ハ必要ナル證據ヲ集取スヘシ

受命判事ハ被告ヲ呼出シテ事實ヲ陳述セシムルコトヲ得

被告ハ代理人ヲシテ代理セシムルコトヲ得

證人ハ治罪法ノ規程ニ從ヒ之ヲ訊問スヘシ

第二十四條 受命判事ハ證人訊問其ノ他證據集取ヲ他ノ裁判所ノ判事ニ囑託スルコトヲ得

第二十五條 受命判事ハ下調結了ノ後調書及一分ノ證據ヲ懲戒裁判

所長ニ差出シ裁判所長ハ二十四時内ニ檢事ニ之ヲ送付スヘシ

第二十六條 檢事ハ三日内ニ意見ヲ付シ記録ヲ懲戒裁判所長ニ還付スヘシ

第二十七條 懲戒裁判所ハ下調ヲ十分ナリト思料スルトキハ口頭辯

論ヲ爲スノ決定ヲ爲シ又ハ免訴ノ判決ヲ爲スヘシ

免訴ノ理由ナキモ現時裁判ニ著手スルコトヲ得サルトキハ訴追停止ノ決定ヲ爲スヘシ

第二十八條 前條ノ裁判ハ檢事及被告ニ送達スヘシ

第二十九條 懲戒裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第三十條 辯論ハ之ヲ公行セス

第三十一條 口頭辯論ハ裁判所書記開始決定ヲ朗讀スルヲ以テ始マルモノトス

裁判長ハ先ツ被告ヲ審訊シ次テ證據調ヲ爲シ檢事及被告ヲシテ證據ノ結果ニ付辯論ヲ爲サシメ被告ニ最終ノ發言ヲ許スヘシ

第三十二條 懲戒裁判所ハ被告若ハ檢事ノ申立ニ因リ又ハ職權ヲ以テ更ニ證據ヲ提出セシムルコトヲ適當ナリトスルトキハ之カ爲必
要ナル命令ヲ發シ且辯論ヲ他日ニ延期スルコトヲ得

第三十三條 被告ハ他人ヲシテ辯護セシメ又ハ代理人ヲ用非ルコトヲ得

第三十四條 懲戒裁判所ハ事件ノ辯論既ニ十分ナリトスルトキハ之ヲ終結シ評議判決スヘシ

第三十五條 判決ハ即時ニ之ヲ言渡ス若シ即時ニ之ヲ言渡スコト能ハサルトキハ七日内ニ判決ヲ被告及檢事ニ送達スヘシ

第三十六條 被告又ハ代理人辯論期日ニ出頭セスト雖判決ヲ言渡スコトヲ得

第三十七條 評議及言渡ニ關シテハ裁判所構成法ノ規程ニ從ヒ證據ノ判斷ニ關シテハ治罪法ノ規程ニ從フ

第三十八條 被告及檢事ハ十四日ノ期間内ニ控訴ノ申立ヲ爲スコトヲ得但シ其ノ期間ハ判決言渡ヨリ起算ス若シ被告出頭セサルトキハ判決ノ送達アリタルヨリ起算ス

第三十九條 控訴ノ申立ハ判決ヲ受ケタル懲戒裁判所ニ之ヲ爲スヘシ

控訴狀ハ控訴ノ申立ヲ爲シタルヨリ十四日ノ期間内ニ之ヲ差出スヘシ

第四十條 懲戒裁判所ハ控訴ノ申立及控訴狀ノ謄本ヲ對手人ニ送達スヘシ

對手人ハ送達ヲ受ケタルヨリ十四日ノ期間内ニ答辯書ヲ差出スコトヲ得

第四十一條 懲戒裁判所ハ前條ノ期間經過シタル後其ノ書類ヲ控訴裁判所ニ送付スヘシ

控訴裁判所長ハ口頭辯論ノ期日ヲ定メ被告ヲ呼出スヘシ

第四十二條 控訴裁判所ハ第一審ニ於テ申出テサル證據ヲ提出シタルトキハ之ヲ取調フヘシ若シ第一審ニ於テ訊問シタル證人ノ再訊問ヲ申立テタルトキハ其ノ重要ノ點ニ於テ陳述ヲ異ニシ又ハ新ナル重要ノ事實ヲ證言セントノ推測十分ナルトキニ限り之ヲ許ス職權ヲ以テスル訊問ハ何時ニテモ之ヲ爲スコトヲ得

第四十三條 第二審ニ於ケル裁判手續ハ第三十條乃至第三十七條ノ規程ヲ適用ス

第四十四條 控訴ヲ理由ナシトスルトキハ判決ヲ以テ之ヲ棄却シ其ノ費用ヲ控訴人ニ負擔セシムヘシ
控訴ヲ理由アリトスルトキハ第一審判決言渡ヲ取消シ控訴裁判所

更ニ判決ヲ爲シ且其ノ費用ニ付裁判ヲ爲スヘシ

控訴完結ノ後其ノ記録ハ第二審ニ於テ爲シタル判決ノ認證アル臈本ト共ニ原裁判所ニ之ヲ還付スヘシ

第四十五條 調書ノ調製期間ノ計算及書類ノ送達ニ付テハ治罪法ノ規程ニ從フ

懲戒裁判手續ノ費用ハ刑事裁判費用ニ關ル規程ニ從フ

第四十六條 懲戒裁判所ノ裁判ハ確定ノ後ニ非サレハ之ヲ執行スルコトヲ得ス

第四十七條 懲戒裁判確定シタルトキハ懲戒裁判所長ハ司法大臣ニ事件ノ情況ヲ報告シ且判決ノ臈本ヲ差出スヘシ

第四十八條 懲戒裁判所減俸轉所若ハ停職ノ裁判ヲ言渡シタルトキハ司法大臣其ノ執行ノ手續ヲ爲ス

第五章 職務停止

第四十九條 判事ハ左ノ場合ニ於テハ當然職務ヲ停止セララルモノトス

第一 刑事裁判手續ニ於テ勾留セラレタルトキ

第二 刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ニ該ル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第三 懲戒裁判ニ依テ免職ノ言渡ヲ受ケタルトキ

第五十條 刑事裁判ニ依テ拘留ノ刑ノ確定裁判ヲ受ケタルトキハ其ノ刑期ノ終ルマテ當然職務ヲ停止セララルモノトス

第五十一條 懲戒裁判所ハ懲戒事件ノ轉所停職若ハ免職ニ該當スルモノト思料スルトキハ何時ニテモ職權ヲ以テ又ハ檢事ノ申立ニ因リ懲戒裁判手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得但シ職權ヲ以テ決定ヲ爲ストキハ檢事ノ意見ヲ聽クヘシ刑事裁判手續中何レノ場合ニ於テ懲戒裁判所ハ其ノ手續結了ニ至ルマテ被告ノ職務ヲ停止スルコトヲ決定スルヲ得

第五十二條 懲戒裁判所ノ決定ニ因リ又ハ當然職務ヲ停止セラレタル後其ノ判事ノ爲シタル職務上ノ行爲ハ無効トス

第五十三條 被告ハ職務停止ノ決定ニ對シ上訴ヲ爲スコトヲ得ス

第六章 懲戒裁判手續ト刑事裁判手續トノ關係

第五十四條 刑事裁判手續中ハ同事件ニ付被告ニ對シ懲戒裁判手續ヲ開始スルコトヲ得ス

懲戒裁判所ニ於テ判決ノ言渡前同事件ニ付被告ニ對シ刑事訴訟ノ始マリタルトキハ其ノ事件ノ判決ヲ終ルマテ懲戒裁判手續ヲ停止スヘシ

第五十五條 刑事裁判ニ依テ法律ニ觸レサルニ因リ免職又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルトキト雖同一ノ所爲ニ付懲戒裁判手續ニ依テ仍ホ訴追スルヲ妨ケス
刑事裁判ニ依テ官職ノ喪失ヲ起ササル刑ノ言渡ヲ受ケタルトキハ

懲戒裁判手續ニ於テ仍ホ訴追スルコトヲ得

第七章 補則

第五十六條 懲戒スヘキ所爲ハ本法實施前ニ關ルト雖本法ニ從ヒ之ヲ訴追ス

第五十七條 此法律ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

○判事檢事官等俸給令(明治二十三年八月勅令第五百十八號)

朕茲ニ判事檢事官等俸給令ヲ裁可ス

判事檢事官等俸給令

第一條 判事檢事ノ官等年俸ハ別表定ムル所ニ依ル

第二條 判事檢事ノ各職ニ付其人員官等年俸ヲ限定スルコト左ノ如シ

大審院

長

一人

勅任一等

年俸五千圓

但特ニ年俸五千五百圓ヲ給スルコトアルヘシ

部長

三人

勅任一等二等

年俸四千五百圓四千圓

檢事

二十七人

勅任二等乃至奏任二等

年俸三千五百圓乃至千八百圓

大審院檢事局

檢事總長

一人

勅任一等

年俸五千圓又ハ四千五百圓

檢事

五人

勅任二等乃至奏任二等

年俸三千五百圓乃至千八百圓

控訴院

長

七人

裁判所構成法 (刑事檢察官等俸給令)

東京 勅任一等

年俸四千五百圓

其他 勅任二等

年俸四千圓三千五百圓

部長

十五人

奏任一等二等

年俸二千六百圓乃至千八百圓

判事

八十五人

奏任三等四等

年俸千六圓乃至千圓

控訴院 檢事局

檢事長

七人

勅任二等

年俸 東京 四 千 圓
大阪 四 千 圓
其他 三千五百圓三千圓

檢事

二十人

奏任一等乃至四等

年俸二千四百圓乃至千圓

地方裁判所

長

四十八人

東京 奏任一等

年俸二千六百圓

其他 奏任一等乃至三等

年俸二千四百圓乃至千六百圓

部長

九十人

奏任三等四等

年俸千四百圓乃至千圓

判事

四百十五人

奏任四等乃至六等

年俸九百圓乃至五百圓

地方裁判所 檢事局

檢事正

四十八人

東京 奏任一等

年俸二千四百圓

其他 奏任二等乃至四等

年俸二千二百圓乃至千百圓

檢事

百二十五人

奏任四等乃至六等

年俸千圓乃至五百圓

區裁判所

裁判所構成法 (刑事檢察官等俸給令)

判事

八百四十人

奏任四等乃至六等

年俸九百圓乃至五百圓

區裁判所檢察局

檢察

二百七十五人

奏任四等乃至六等

年俸九百圓乃至五百圓

第三條 豫備判事ハ其人員ヲ三十五人トシ豫備檢察ハ其人員ヲ十五人トス

豫備判事豫備檢察ハ奏任六等ニ叙シ年俸四百圓ヲ給ス

司法官試補ハ其人員ヲ百十人トス

司法官試補ハ其待遇ヲ奏任トシ年俸三百圓以下ヲ給ス

第四條 第二條ノ各職中年俸ニ等差アルモノハ每俸平等ニ其人員ヲ定ム但端數ノ人員ヲ生スルトキハ最下級ヨリ漸次上級ノ人員ニ併合ス

第五條 裁判所構成法第六十二條ニ依リ新任スル判事又ハ檢察ニシ

テ直チニ補職スル者ハ奏任六等ニ叙シ年俸五百圓ヲ給ス豫備判事

又ハ豫備檢察コシテ補職スル者モ亦同シ

裁判所構成法第六十五條第一項ニ依リ新任スル判事又ハ檢察ハ其

補スヘキ職ノ最下ノ官等ニ叙シ最下ノ年俸ヲ給ス

判事又ハ檢察ニシテ他ニ轉官シ若ハ退官シタル者ヲ更ニ判事又ハ

檢察ニ任スルトキハ前官ト同等若ハ其以下ノ官等ニ叙シ前官ト同

年俸若ハ其以下ノ年俸ヲ給ス

第六條 判事又ハ檢察ノ進級ハ關員アルトキニ限り之ヲ行フ

進級トハ陞等又ハ増俸ヲ謂フ

第七條 判事又ハ檢察ノ進級ハ第二條ニ掲ケタル各職毎ニ先任ノ順序ニ依リ之ヲ行フ但區裁判所判事ハ地方裁判所判事ト併合シ區裁判所檢察局檢察ハ地方裁判所檢察局檢察ト併合シテ先任順序ヲ定

ヲ進級セシム

大審院ノ部長判事大審院検事局ノ検事總長検事控訴院ノ長部長判事控訴院検事局ノ検事長検事地方裁判所ノ長部長及地方裁判所検事局ノ検事正ノ補職ハ拔擢ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得但官等ヲ超越セシムルコトヲ得ス又其補スヘキ職ノ最下ノ年俸ニ非サレハ給スルコトヲ得ス

東京大阪ノ控訴院ノ長同院検事局ノ検事長及東京大阪ノ地方裁判所ノ長同地方裁判所検事局ノ検事正ノ補職モ亦拔擢ヲ以テ之ヲ行フコトヲ得但官等ヲ超越セシムルコトヲ得ス

第八條 判事検事ノ各職ニ於ケル先任順序ハ年俸ノ多寡ニ依リ之ヲ定ム年俸相同シキモノハ年俸下賜辭令ノ日付ノ前後ニ依リ其日付相同シキモノハ前年俸下賜辭令ノ日付ノ前後ニ依リ其日付相同シキモノハ年齢ニ依リ之ヲ定ム

判事検事ノ裁判所内ニ於ケル席次ハ前項ノ規程ニ從フ

第九條 判事又ハ検事轉職スルトキハ前職ト同年俸若ハ其以下ノ年俸ニ非サレハ給スルコトヲ得ス此場合ニ於テハ前職ノ年俸下賜辭令ノ日付ノ前後ニ依リ後職ノ先任順序ヲ定ム

待命ノ判事又ハ検事補職セラレ、トキ及司法行政官吏ニシテ判事検事タルノ資格ヲ有スル者判事又ハ検事ニ轉任シ補職セラレ、トキモ亦同シ

退職ノ判事又ハ検事補職セラレ、トキハ前職ト同年俸若ハ其以下ノ年俸ニ非サレハ給スルコトヲ得ス此場合ニ於テハ後職ノ年俸下賜辭令ノ日付ノ前後ニ依リ先任順序ヲ定ム

第十條 高等官官等俸給令第二條第三條第四條第六條第二十一條乃至第二十四條第二十六條及第二十七條ハ判事検事ニモ亦之ヲ準用ス

附則

第十一條 裁判所構成法實施ノ際敍任スル者ハ第七條第一項ノ規程ニ依ラス進級セシムルコトヲ得

第十二條 裁判所構成法實施ノ際在職ノ裁判官檢察官ハ其官等年俸第二條ニ定メタル官等年俸ヨリ高等多額ナルモ其官等年俸ノ儘其職ニ補スルコトヲ得

第十三條 本令ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

官等	勅		任														
	一	二	一	二	三	四	五	六									
年俸 五千五百圓	上 五千圓	下 四千五百圓	上 四千圓	中 三千五百圓	下 三千圓	上 二千八百圓	中 二千六百圓	下 二千四百圓	上 二千二百圓	中 二千圓	下 一千八百圓	上 一千六百圓	中 一千四百圓	下 一千二百圓	上 一千圓	中 八百圓	下 七百圓

○裁判所書記長書記官等俸給(明治廿三年八月勅令第百五十九號)

朕茲ニ裁判所書記長書記ノ官等俸給ヲ裁可ス

裁判所書記長書記官等俸給

第一條 書記長ノ官等ハ奏任三等又ハ四等トス

裁判所書記ハ判任一等以下六等以上トス但判任官六等ニハ八圓九圓拾圓ノ月俸ヲ給スルコトヲ得

裁判所書記見習ハ其待遇ヲ判任トシ月俸七圓以下ヲ給ス但特ニ拾圓マテヲ給スルコトアルヘシ

第二條 裁判所書記ノ各職ニ付其人員ヲ限定スルコト左ノ如シ

大審院

書記長

一人

裁判所書記

二十人

大審院檢事局

裁判所書記

五人

控訴院

書記長

七人

裁判所書記

百四十五人

控訴院檢事局

裁判所書記

二十五人

地方裁判所

裁判所書記

七百七十五人

地方裁判所檢事局

裁判所書記

百五十人

區裁判所

裁判所書記

四千六百人

區裁判所檢事局

裁判所書記

四百八十五人

第三條 本令ハ明治二十三年十一月一日ヨリ施行ス

○裁判所位置及管轄區域表（明治二十三年八月）
（法律第六十二號）

朕裁判所位置及管轄區域改定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ裁判所構成法實施ノ日ヨリ效力ヲ有ス

裁判所位置及管轄區域別表ノ通改定ス但新置裁判所開廳ノ期日ハ司法大臣之ヲ定ム（別表略之）

○地方裁判所支部及其管轄區裁判所（明治二十三年八月）
（司法省令第三號）

明治二十三年二月法律第六號裁判所構成法第三十一條ニ依リ地方裁判所支部及其管轄左表甲乙號ノ通相定メ甲號支部ニ於テハ重罪公判及民事第二審ヲ除ク外地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル事務乙號支部ニ於テハ豫審ヲ要スルモノヲ除ク外地方裁判所ノ裁判權ニ屬スル刑事第一審ノ事務ヲ取扱ハシム

但本令ハ明治二十三年十一月一日ヨリ實施ス

裁判所構成法（裁判所位置及管轄區域表）（地方裁判所支部及其管轄區裁判所）百十七

甲號

支部	管轄區	裁判所
八王子	八王子	
八日市場	八日市場	佐原
木更津	木更津	北條
土浦	土浦	麻生 龍ヶ崎
下妻	下妻	
栃木	栃木	佐野
熊谷	熊谷	大宮
高崎	高崎	富岡
濱松	濱松	掛川
松本	松本	上諏訪 大町 福嶋
飯田	飯田	伊奈
上田	上田	岩村田
新發田	新發田	村上

長岡	長岡	柏崎 六日町
高田	高田	糸魚川
相川	相川	
宮津	宮津	峰山 福知山 舞鶴
洲本	洲本	
姫路	姫路	社 龍野
豊岡	豊岡	村岡
津山	津山	勝山
彦根	彦根	長濱
小濱	小濱	敦賀
七尾	七尾	高濱 輪嶋
田邊	田邊	御坊 新宮
脇町	脇町	川島
中村	中村	
宇和嶋	宇和嶋	

岡崎	岡崎	西尾	豐橋	新城
山田	山田	木本		
高山	高山			
尾道	尾道	福山		
赤間關	赤間關	船木		
濱田	濱田	大森	益田	
西郷	西郷			
米子	米子	溝口		
平戸	平戸	武生水		
福江	福江			
嚴原	嚴原			
久留米	久留米	福嶋	柳河	
小倉	小倉	行事		
中津	中津	玉津		
豆田	豆田			

乙號

天草	天草			
大嶋	大嶋			
石卷	石卷	登米	氣仙沼	
白河	白河			
平	平			
若松	若松	田嶋		
米澤	米澤	長井		
酒田	酒田			
鶴岡	鶴岡			
磐井	磐井	水澤		
大曲	大曲	横手	湯澤	
弘前	弘前	鯨澤	五所川原	
八戸	八戸			

沼津	沼津	下田	吉原
谷村	谷村		
園部	園部		
篠山	篠山	柏原	
高梁	高梁	新見	
玉嶋	玉嶋	笠岡	
小松	小松	大聖寺	
高岡	高岡	杉本新	
西條	西條	今治	
丸龜	丸龜	觀音寺	
四日市	四日市	龜山	
上野	上野		
三次	三次	庄原	
岩國	岩國	柳井津	
萩	萩		

鳴原	鳴原		
唐津	唐津	伊萬里	
八代	八代	人吉	
延岡	延岡	高千穂	
古川	古川		
宮古	宮古		
能代	能代	大館	花輪

○區裁判所出張所管轄區域表(明治廿三年八月 司法省令第四號)

區裁判所出張所管轄區域別冊ノ通改定ス但新置出張所開庭迄其管内登記事務ハ従前ノ管轄應ニ於テ之ヲ取扱ハシム(別表略之)

民法

○增價競賣法(明治廿三年十月 法律第二十九號)

朕增價競賣法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

增價競賣法

第一條 民法債權擔保編第二百六十五條ニ從ヒテ抵當財産ノ增價競賣ヲ要求スル債權者ハ第三所持者及ヒ前所有者ニ競賣ノ要求書ヲ送達シタルヨリ三日内ニ抵當財産所在地ノ區裁判所ニ競賣ノ申立ヲ爲シ且保證人又ハ擔保ノ認許ヲ求ム可シ
前項ノ手續ヲ爲ササルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス

○參照(民法債權擔保編)

第二百六十五條

凡ソ抵當ヲ登記シタル債權者ニシテ上ニ定メタル提

民法(增價競賣法)

供テ受諾セサル者ハ左ノ方式、期間及ヒ條件ヲ以テ抵當財産競賣ヲ要求スルコトヲ要ス

第一 其要求ニハ提供金額ノ上少ナクトモ十分一ノ増價ニテ買受クコトト其増額シタル代價ノ全部及ヒ費用ノ爲メ十分ナル保證人又ハ擔保ヲ供スル旨ノ陳述トヲ添フルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ其要求ハ無效タリ但此場合ニ於テハ總テノ正本ニ要求者又ハ其特別代理人ノ署名アルコトヲ要ス

第二 右ノ要求ハ提供告知ヨリ一个月内ニ第三所有者ニ之ヲ送達スルコトヲ要ス若シ此ニ違フトキハ其要求ハ亦無效タリ

第三 右ノ期間ニ於テ債務者タルト否トチ問ハス前所有者ニ右ニ同シキ送達ヲ爲スコトヲ要ス

第四 主タル債務者ニ非ル者カ抵當ヲ設定シタルトキモ亦同一ノ期間ニ於テ其債務者ニ送達ヲ爲スコトヲ要ス

第二條 競賣ノ申立ニハ^(イ)民事訴訟法第六百四十二條第一號及ヒ第二號ニ掲クル諸件ノ外第三所持者及ヒ前所有者ノ表示、擔保ノ表示、

第三所持者ノ提供シタル金額及ヒ要求者ノ定メタル増額ヲ具備シ且^(ロ)民事訴訟法第六百四十三條第三號乃至第五號ノ證書ヲ添附スルコトヲ要ス

○参照(民事訴訟法)

(イ)第六百四十二條 強制競賣ノ申立ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 債權者、債務者及裁判所ノ表示

第二 不動産ノ表示

(ロ)第六百四十三條 申立ニハ執行力アル正本ノ外左ノ證書ヲ添附ス可シ

第三 地所ニ付テハ國郡市町村字番地目反別若クハ坪數、土地臺帳ニ登録シタル地價及ヒ其地所ニ付キ納ム可キ一年ノ公課ヲ證ス可キ證書

第四 建物ニ付テハ國郡市町村字番地、構造ノ種類、建坪及ヒ其建物ニ付キ納ム可キ一年ノ公課ヲ証ス可キ證書

第五 地所建物ニ付キ貸貸借アル場合ニ於テハ其期限並ニ借賃ヲ

証ス可キ證書

第三條 裁判所ハ期日ヲ定メテ要求者第三所持者及ヒ前所有者ヲ呼出シ擔保ノ許否ニ付テノ決定ヲ爲ス可シ

否認ノ決定アリタルトキハ競賣ノ要求ハ當然無効ナリトス但競賣ノ要求ヲ爲ス權利アル他ノ債權者カ要求ニ参加スルノ申立ヲ爲シ又ハ期間ニ自ラ要求ヲ爲シタルトキハ右決定ヲ知タルヨリ三日内ニ更ニ第一條ノ手續ヲ爲スコトヲ妨ケス

第四條 左ニ掲クル者ヲ増價競賣手續ニ於テノ利害關係人トス

第一 競賣要求者

第二 債務者

第三 所持者

第四 抵當債權者

第五 抵當財産ノ前所有者カ債務者ニ非サルトキハ其前所有者

第五條 裁判所ハ要求者ノ供シタル擔保ヲ十分ナリトスルトキハ競賣手續ノ開始決定ヲ爲シ同時ニ競賣期日及ヒ競落期日ヲ定メテ公告ス可シ

第六條 競賣期日ノ公告ニハ^(イ)民事訴訟法第六百五十八條第一號乃至第三號、第五號、第七號乃至第十號ニ掲クル諸件ノ外増價競賣ノ要求ニ因リ競賣ヲ爲ス旨及ヒ最低競賣價額トシテ提供價額ニ附シタル増額ヲ具備スルコトヲ要ス

此他競賣及ヒ競落ノ手續ニ付テハ^(ロ)民事訴訟法第六百五十九條乃至第六百六十一條、^(ハ)第六百六十三條乃至第六百六十九條、^(ニ)第六百七十一條、^(ホ)第六百七十二條第二號及ヒ第四號乃至第八號、^(ヘ)第六百七十三條、^(ト)第六百七十四條、^(チ)第六百七十六條乃至第六百八十七條ノ規定ヲ準用ス

○参照(民事訴訟法)

民法（増價買法）

(イ)第六百五十八條 競賣期日ノ公告ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 不動産ノ表示

第二 租税其他ノ公課

第三 貸貸借アル場合ニ於テハ其期限竝ニ借貸

第五 競賣期日ノ場所日時及ヒ競賣ヲ爲ス可キ執達吏ノ氏名竝ニ住所

第七 競落期日ノ場所及ヒ日時

第八 執行記録ヲ閲覧シ得ヘキ場所

第九 登記簿ニ記入ヲ要セサル不動産上權利ヲ有スル者其債權ヲ申出ツ可キ旨

第十 利害關係人競賣期日ニ出頭ス可キ旨

(ロ)第六百五十九條 競賣期日ハ公告ノ日ヨリ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ

此期日ハ裁判所ノ意見ヲ以テ裁判所内又ハ其他ノ場所ニ於テ執達吏ヲシテ之ヲ開カシム

第六百六十條 競落期日ハ競賣期日ヨリ七日ヲ過クルコトヲ得ス

此期日ハ裁判所ニ於テ之ヲ開ク

第六百六十一條 競賣期日ノ公告ハ左ノ箇條ニ揭示シテ之ヲ爲ス

第一 裁判所ノ揭示板

第二 不動産所在地ノ市町村ノ揭示板

此他公告ハ裁判所ノ意見ニ從ヒ一箇又ハ數箇ノ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得

(ハ)第六百六十三條 競賣期日ヲ開キタル後執達吏ハ執行記録ヲ各人ノ閲覧ニ供シ又特別ノ賣却事件アルキハ之ヲ告知シ且競買價額申出ヲ催告ス可シ

第六百六十四條 利害關係人カ或ル競買人ヨリ保証ヲ立テシメシコトヲ申立ツルトキハ其競買人カ保證トシテ競買價額十分一ニ當ル金額ヲ現金又ハ有價証券ヲ以テ直チニ執達吏ニ預クルトキニ非サレハ其競買ヲ許サス

右申立ハ競買價額ノ申出アリタル後直チニ之ヲ述フルコトヲ要ス其申立ハ同一ナル競買人ノ其後ノ競買ニ付テモ亦效力アリ

民法（増價買法）

民法（増價競賣法）

八

第六百六十五條 競買ヲ許サレタル各競買人ハ更ニ高價ノ競買ノ許アルマテ其申出テタル價額ニ付キ拘束ヲ受クルモノトス
競賣ハ競買價額ヲ申立ツ可キ催告後滿一時間ヲ過ケルニ非サレハ之ヲ終局スルコトヲ得ス

第六百六十六條 執達吏ハ最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタル後競賣ノ終局ヲ告知ス可シ
他ノ各競買人ハ右ノ告知ニ因リ其競買ノ責務ヲ免カレ且豫ケタル保証アルトキハ即時ニ其返還ヲ求ムル權利アリ

第六百六十七條 競賣ニ付キ作ル可キ調査ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 不動産ノ表示

第二 差押債權者ノ表示

第三 執行記録ヲ各人ノ閲覧ニ供シタルコト又特別賣却條件アルトキハ之ヲ告知シタルコト

第四 競買價額ノ申出ヲ催告シタル日時

第五 總テノ競買價額並ニ其申出人ノ氏名、住所又ハ許ス可キ競買ノ申出ナキコト

第六 競賣ノ終局ヲ告知シタル日時

第七 申立ニ因リ競買ノ爲メ保証ヲ立テタルコト又ハ申立アルモ保証ヲ立テサル爲メ其競買ヲ許ササルコト

第八 最高價競買人ノ氏名及ヒ其價額ヲ呼上ケタルコト

最高價競買人及ヒ出頭シタル利害關係人ハ調査ニ署名捺印ス可シ若シ此等ノ者調査ノ作成前ニ退席シタルトキハ其旨ヲ附記ス可シ
競買ノ保証ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價証券ヲ返還シタルトキハ執達吏ハ受取証ヲ取り之ヲ調査ニ添附ス可シ

第六百六十八條 執達吏ハ調査及ヒ總テ競買ノ保証ノ爲メ預リタル金銭又ハ有價証券ニシテ返還セサルモノハ三日内ニ裁判所書記ニ之ヲ渡ス可シ

第六百六十九條 最高價競買人執行裁判所ノ所在地ニ住居ナモ事務所ヲ有セザルトキハ其所在地ニ假住所ヲ選定シ其旨ヲ裁判所ニ届出

民法（増價競賣法）

九

民法（増價競買法）

十

少可シ若シ之ヲ怠リタルトキハ第四百四十三條第三項ノ規定ヲ準用ス
住所ノ選定ハ執達吏ニ口述シ其調書ヲ作ラシメテ之ヲ爲スコトヲ得
（三）第六百七十一條 裁判所ハ競落期日ニ出頭シタル利害關係人ニ競落ノ
許可ニ付キ陳述ヲ爲サシム可シ

競落ノ許可ニ付テノ異議ハ期日ノ終ニ至ルマテニ之ヲ申立ツ可シ既
ニ申立テタル異議ニ對スル陳述ニ付テモ亦同シ

（*）第六百七十二條 競落ノ許可ニ付テノ異議ハ左ノ理由ニ基クコトヲ要
ス

第一 競制執行ヲ許ス可カラサルコト又ハ執行ヲ續行ス可カラサ
ルコト

第二 最高價競買人賣買契約ヲ取結ヒ若クハ其不動産ヲ取得スル
能力ナキコト

第三 法律上ノ賣却條件ニ牴觸シテ競買ヲ爲シタルコト又ハ總テ
ノ利害關係人ノ合意ヲ得スシテ法律上ノ賣却條件ヲ變更シタル
コト

第四 競買期日ノ公告ニ第六百五十八條ニ掲ケタル要件ノ記載ナ
キコト

第五 競買期日ノ公告ハ法律上規定シタル方法ニ依リテ之ヲ爲サ
サルコト

第六 第六百五十九條ニ規定シタル期間ヲ存セザリシコト

第七 第六百六十五條第二項及ヒ第六百六十六條第一項ノ規定ニ
違背シタルコト

第八 第六百六十四條ノ規定ニ違背シ最高價競買人ナリト呼上ケ
タルコト

（一）第六百七十三條 異議ハ他ノ利害關係人ノ權利ニ關スル理由ニ基テハ
之ヲ許サス

（ト）第六百七十四條 裁判所ハ異議ノ申立ヲ正當トスルトキハ競落ヲ許サ
ス

第六百七十二條第一號乃至第八號ニ掲ケタル事項ノ一アルトキハ職
權ヲ以テモ競落ヲ許サス但第一號ノ場合ニ於テハ競買シタル不動産

民法（増價競買法）

十一

ヲ譲渡スコトヲ得サルモノナルトキ又ハ競賣手續ノ停止ヲ爲シタルトキニ限り第二號ノ場合ニ於テハ能力若クハ資格ノ欠缺ヲ除去セラレサルトキニ限り第三號ノ場合ニ於テハ利害關係人手續ノ履行ニ付キ承認セサルトキニ限ル

(チ)第六百七十六條 第六百七十二條及ヒ第六百七十四條ノ規定ニ從ヒ全ク競落ヲ許ササル場合ニ於テ更ニ競賣ヲ許スコトキハ職權ヲ以テ新競賣期日ヲ定ム可シ

新競賣期日ハ少ナクトモ十四日ノ後タル可シ

第六百七十七條 前條ノ規定ニ從ヒテ新競賣期日ヲ定ムル場合ノ外競落ヲ許シ又ハ許ササル決定ノ言渡ヲ爲スコシ

競落期日ノ調査ニ付テハ第百二十九條乃至第百三十二條及ヒ第百三十四條ノ規定ヲ準用ス

第六百七十八條 競賣期日トノ間ニ天災其他ノ事變ニ因リ不動産カ著シク毀損シタルトキハ最高價競買人タル呼上ヲ受ケタル者其競買ヲ取消ス權利アリ其毀損ノ著シキヤ否ヤハ裁判所事情ヲ斟酌シテ之ヲ

定ム

第六百七十九條 競落ヲ許ス決定ニハ競賣ヲ爲シタル不動産競落人及ヒ競落ヲ許シタル競買價額ヲ掲ケ又特別ノ賣却條件ヲ以テ競落ヲ爲シタルトキハ其條件ヲ掲ケ可シ

右決定ハ之ヲ言渡ス外尙ホ裁判所ノ掲示板ニ揭示シテ公告スコシ
第六百八十條 利害關係人ハ競落ノ許否ニ付テノ決定ニ因リ損失ヲ被ムル可キ場合ニ於テハ其決定ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

競落ヲ許スコキ理由ナキコト又ハ決定ニ掲ケタル以外ノ條件ヲ以テ許スコキコトヲ主張スル競落人又ハ競落ヲ求メ之ヲ許スコキコトヲ主張スル競買人モ亦即時抗告ヲ爲スコトヲ得

右抗告ハ執行停止ノ効力ヲ有ス
第二項ノ場合ニ於テ競落ヲ求メタル競買人ハ其中出テタル價額ニ付キ約束ヲ受クルモノトス

第六百八十一條 競落ヲ許ササル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲クル總テノ不許ノ原因ナキコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ

得

競落ヲ許シタル決定ニ對スル抗告ハ此法律ニ掲ケル競落ノ許可ニ對スル異議ノ原因ノ一ヲ理由トスルトキ又ハ競落決定カ競落期日ノ調書ノ旨趣ニ抵觸シタルコトヲ理由トスルトキニ限り之ヲ爲スコトヲ得取消ノ訴若クハ原狀回復ノ訴ノ要件ヲ理由トスル抗告ハ前二項ノ規定ニ依リ妨ケラレルコト無シ

第六百八十二條 抗告裁判所ハ必要ナル場合ニ於テハ反對陳述ヲ爲サシムル爲メ抗告人ノ相手方ヲ定ム可シ

一ノ決定ニ關スル數箇ノ抗告ハ互ニ之ヲ併合ス可シ

第六百七十三條及ヒ第六百七十四條ノ規定ハ抗告審ニモ亦之ヲ準用ス

第六百八十三條 執行裁判所ノ決定ヲ廢棄シ又ハ廢棄シタル抗告裁判所ノ裁判ハ執行裁判所之ヲ裁判所ノ揭示板ニ揭示シテ公告ス可シ

第六百八十四條 競落ヲ許ササル決定確定シタルトキハ競落人及競落ヲ求メタル競買人ハ其競買ノ資務ヲ免カル

第六百八十五條 第六百七十八條ノ場合ニ於テ競買取消ノ爲メ競落ヲ許ササルトキハ第六百五十五條乃至第六百五十七條ノ規定ヲ準用ス

第六百八十六條 競落人ハ競落ヲ許ス決定ニ因リテ不動産ノ所有權ヲ取得スルモノトス

第六百八十七條 競落人ハ代金ノ全額ヲ支拂ヒタル後ニ非サレハ不動産ノ引渡ヲ求ムルコトヲ得ス

競落人若クハ債權者競落ヲ許ス決定アリタル後引渡アルマテ管理人ヲシテ不動産ヲ管理セシメンコトヲ申立テタルハ裁判所ハ之ヲ命ス可シ

債務者カ引渡ヲ拒ミタルトキハ競落人若クハ債權者ノ申立ニ因リ裁判所ハ執達吏ヲシテ債務者ノ占有ヲ解キ其不動産ヲ管理人ニ引渡サシム可シ

第七條 競賣期日ニ於テ許ス可キ競買價額ノ申出ナキトキハ裁判所ハ要求者ヲ競落人ナリト言渡ス可シ

第八條 競落人ナリト言渡サレタル者カ要求者ナルト否トヲ問ハス
競落代價ノ全額支拂ニ至ルマテハ要求者ノ供シタル擔保ハ負擔ヲ
免カルルコト無シ

第九條 裁判所ハ要求者ノ申立アルトキハ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命
ス可シ

前項ノ場合ニ於テハ^(イ)民事訴訟法第七百二條但書及ヒ^(ロ)第七百三
條乃至第七百五條ノ規定ヲ適用ス

○参照（民事訴訟法）

第七百二條 裁判所ハ競賣期日ノ公告前利害關係人ノ申立ニ因リ又ハ
職權ヲ以テ競賣ニ換ヘテ入札拂ヲ命スルコトヲ得但入札拂ニ付テハ
以下數條ニ於テ別段ハ規定ナキモハハ前數條ノ規定ヲ準用ス

第七百三條 入札ハ入札期日ニ於テ執達吏ニ之ヲ差出ス可シ

入札ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 入札人ノ氏名及住所

第二 不動産ノ表示

第三 入札價額

第七百四條 執達吏ハ入札人ノ面前ニ於テ入札ヲ開封シ之ヲ朗讀ス可
シ

二人以上同價額ノ入札アルトキハ執達吏ハ其者ヲシテ追加ノ入札ヲ
爲サシメ最高價入札人ヲ定ム

一定ノ金額ヲ以テ入札價額ヲ表セスシテ他ノ入札價額ニ對スル比例
ヲ以テ價額ヲ表シタル入札ハ之ヲ許サス

第七百五條 最高價入札タル呼上ヲ受ケタル者第六百六十四條ノ規定
ニ從ヒ保証ヲ立ツ可キ求テ受クルモ之ヲ立テサルトキハ其次位ノ入
札人ヲ以テ最高價入札人ト定ム但此場合ニ於テ最初呼上ヲ受ケタル
者ハ其入札價額トノ差金ヲ負擔スル義務ナリ

第十條 増價競賣ニ依ル競落ニ對シテハ更ニ増價競賣ノ要求ヲ爲ス
コトヲ許サス

○裁判上代位法（明治二十三年十月法律第九十三號）

朕裁判上代位法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

裁判上代位法

第一條 民法財産編第三百三十九條ノ規定ニ從ヒテ債務者ニ屬スル訴權ヲ行ハントスル債權者ハ先ツ債務者ニ其行使ヲ合式ニ催告スルコトヲ要ス

○参照（民法財産編）

第三百三十九條 債權者ハ其債務者ニ屬スル權利ヲ申立テ及ヒ其訴權ヲ行フコトヲ得

債權者ハ此事ノ爲メ或ハ差押ノ方法ニ依リ或ハ債務者ノ原告又ハ被告タル訴ニ参加スルコトニ依リ或ハ民事訴訟法ニ從ヒテ得タル裁判上ノ代位ヲ以テ第三者ニ對スル間接ノ訴ニ依ル

然レトモ債權者ハ債務者ニ屬スル純然タル權能又ハ債務者ノ一身ニ專屬スル權利ヲ行フコトヲ得ヌ又法律又ハ合意ノ明文ヲ以テ差押ヲ禁シタル財産ヲ差押フルコトヲ得ヌ

債務者右催告ヲ受ケタル後ハ權利ヲ讓渡スコトヲ得ヌ

第二條 債務者前條ノ催告ヨリ七日内ニ被告ト爲ル可キ第三者ニ對シテ訴ヲ提起セサルトキハ債權者ハ債務者ノ住所地ノ裁判所ニ代位ノ申請ヲ爲スコトヲ得但催告書ノ謄本ヲ差出ス可シ

第三條 代位ノ申請ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 債權者、債務者、被告ト爲ル可キ第三者及ヒ裁判所ノ表示

第二 代位申請ノ原因タル債權ノ表示

第三 訴訟物ノ表示

第四條 裁判所ハ申請ニ付キ債務者ヲ審訊セヌシテ決定ヲ爲スコトヲ得

右申請ノ決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

○財産委棄法（明治二十三年十月）
法律第九十四號

朕財産委棄法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

財産委棄法

第一條 無資力ナル債務者ニシテ惡意ノ證ナキ者ハ動産又ハ不動産ノ差押ヲ受ケタルモ競賣ニ至ルマテハ無資力ノ原因タル不幸ノ事情又ハ管理ノ過失ヲ陳述シテ債權者ニ對シ自己ノ財産ノ委棄ヲ其住所地ノ裁判所ニ請求スルコトヲ得

債務者ハ總債權者ノ氏名及ヒ分限ト各債權者ノ債權ノ元本及ヒ利息トヲ右請求ニ附記スルコトヲ要ス

第二條 財産ノ委棄ハ協諧契約ニ關シ商法ニ規定シタル方式及ヒ條

件ニ從ヒテ債權者ノ承諾ヲ受クルコトヲ要ス

第三條 債權者ノ承諾シタル財産ノ委棄ハ裁判所ノ認可ヲ受クルコトヲ要ス

此他財産ノ委棄ニ付テハ家資分散ニ關スル法律ノ適用ヲ妨ケス

○非訟事件手續法（明治二十三年十月）
法律第九十五號

朕非訟事件手續法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

非訟事件手續法

第一章 認可及ヒ許可ノ申請手續

第一條 民法ノ規定ニ從ヒ區裁判所ノ認可又ハ許可ヲ求ムル申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二條 前條ノ申請ニ付テハ裁判所ハ事情ニ從ヒ利害關係人ノ出頭

又ハ當事者ノ自身出頭ヲ命シ公開セサル法廷ニ於テ審訊スルコトヲ得

第三條 申請ニ付テノ決定ニ對シテハ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

第二章 失踪事件ニ關スル請求手續

第四條 失踪ノ推定宣言又ハ財產占有其他ノ請求ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

請求ニハ其理由トスル事實ヲ表示シ且證據書類アルトキハ之ヲ添付ス可シ

第五條 前條各種ノ請求ハ之ヲ併合スルコトヲ得

第六條 失踪ノ推定又ハ宣言ノ請求ニ付テハ前二條ノ外尙ホ左ノ手續ニ從フ

裁判所ハ請求ニ表示シタル事實ヲ調査シ職權ヲ以テ失踪ノ推定又

ハ宣言ヲ爲スヘキヤ否ヤヲ定ムル爲メ證人訊問ヲ命ス可シ

證人ノ訊問及ヒ宣誓ニ付テハ忌避ノ規則ヲ除ク外民事訴訟法第二編第一章第六節ノ規定ヲ適用ス

○參照（民事訴訟法第六節）人証

第二百八十九條 何人ヲ問ハス法律ニ別段ノ規定ナキ限りハ民事訴訟ニ關シ裁判所ニ於テ証言スル義務アリ

第二百九十條 官吏、公吏ハ退職ノ後ト雖モ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ付テハ其所屬廳又ハ其最後ノ所屬廳ノ許可ヲ得タルトキニ限り証人トシテ之ヲ訊問スルコトヲ得大臣ニ付テハ勅許ヲ得ルコトヲ要ス

此許可ハ証言カ國家ノ安寧ヲ害スル恐アルトキニ限り之ヲ拒ムコトヲ得

右許可ハ受訴裁判所ヨリ之ヲ求め且証人ニ之ヲ通知ス可シ

第二百九十一條 人証ノ申出ハ証人ヲ指名シ及ヒ証人ノ訊問ヲ受ク可

民法（非訟事件手続法）

キ事實ヲ表示シテ之ヲ爲ス

第二百九十二條 證人ノ呼出狀ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

第一 證人及ヒ當事者ノ表示

第二 證據決定ノ旨趣ニ依リ訊問ヲ爲ス可キ事實ノ表示

第三 證人ノ出頭ス可キ場所及ヒ日時

第四 出頭セサルトキハ法律ニ依リ處罰ス可キ旨

第五 裁判所ノ名稱

第二百九十三條 豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ヲ證人トシテ呼出スニハ其所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其長官又ハ隊長ハ期日ヲ遵守セシムル爲ニ其呼出ヲ受ケタル者ノ闕勤ヲ許ス可シ若シ軍務上之ヲ許ス能ハサルトキハ其旨ヲ裁判所ニ通知シ且他ノ期日ヲ定ムル求テ爲ス義務アリ

第二百九十四條 合式ニ呼出サレタル證人ニシテ正當ノ理由ナク出頭セサル者ニ對シテハ申立ナント雖モ決定ヲ以テ其不參ニ因リ生シタル費用ノ賠償及ヒ二十圓以下ノ罰金ヲ言渡ス可シ

證人カ再度出頭セサル場合ニ於テハ更ニ費用ノ賠償及ヒ罰金ヲ言渡ス可シ又其勾引ヲ命スルコトヲ得

證人ハ右ノ決定ニ對シテ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人、軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ軍事裁判所又ハ所屬ノ長官又ハ隊長ニ囑託シテ之ヲ爲ス其勾引ニ付テモ亦同シ

第二百九十五條 證人其出頭セザリシコトヲ後日ニ正當ノ理由ヲ以テ辯解スルトキハ罰金及ヒ賠償ノ決定ヲ取消ス可シ

證人ノ不參届及ヒ決定取消ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第二百九十六條 皇族證人ナルトキハ受命判事又ハ受託判事其所在ニ就キ訊問ヲ爲ス

各大臣ニ付テハ其官廳ノ所在地ニ於テ之ヲ訊問ス可シ其所在地外ニ滞在スルトキハ其現在地ニ於テ之ヲ訊問ス

民法（非訟事件手続法）

民法（非訟事件手續法）

二十六

帝國議會ノ議員ニ付テハ開會期間其議會ノ所在地ニ滯在中ハ其所在地ニ於テ之ヲ訊問ス

第二百九十七條 左ニ掲ケル者ハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 原告若クハ被告又ハ其配偶者ト親族ナルトキ但姻族ニ付テハ婚姻ノ解除シタルトキト雖モ亦同シ

第二 原告若クハ被告ノ後見ヲ受クル者

第三 原告若クハ被告ト同居スル者又ハ雇人トシテ之ニ仕フル者
裁判長ハ訊問前ニ前項ノ者ニ證言ヲ拒ム權利アル旨ヲ告ケ可シ

第二百九十八條 左ノ場合ニ於テハ證言ヲ拒ムコトヲ得

第一 官吏、公吏又ハ官吏、公吏タリシ者カ其職務上默秘ス可キ義務アル事情ニ關スルトキ

第二 醫師、藥商、穩婆、辯護士、公證人、神職及ヒ僧侶カ其身分又ハ職業ノ爲メ委託ヲ受ケタルニ因リテ知リタル事實ニシテ默秘ス可キモノニ關スルトキ

第三 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ耻辱ニ歸ス

ルカ又ハ其刑事上ノ訴追ヲ招ク恐アルトキ

第四 問ニ付テノ答辯カ證人又ハ前條ニ掲ケタル者ノ爲メ直接ニ財産權上ノ損害ヲ生セシム可キトキ

第五 證人カ其技術又ハ職業ノ秘密ヲ公ニスルニ非サレハ答辯スルコト能ハサルトキ

第二百九十九條 證人ハ第二百九十七條第一號及ヒ第二百九十八條第

四號ノ場合ニ於テ左ノ事項ニ付キ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

第一 家族ノ出產、婚姻又ハ死亡

第二 家族ノ關係ニ因リ生スル財産事件ニ關スル事實

第三 證人トシテ立會ヒタル場合ニ於ケル權利行爲ノ成立及ヒ旨趣

第四 原告若クハ被告ノ前主又ハ代理人トシテ係争ノ權利關係ニ關シ爲シタル行爲

前條第一號、第二號ニ掲ケタル者其默秘ス可キ義務ヲ免除セラレタルトキハ證言ヲ拒ムコトヲ得ス

民法（非訟事件手續法）

二十七

民法（非訟事件手續法）

二十八

第三百條 證言ヲ拒ム證人ハ其訊問ノ期日前ニ書面又ハ口頭ヲ以テ又
期日ニ於テ其拒絶ノ原因タル事實ヲ開示シ且之ヲ説明ス可シ
期日前ニ證言ヲ拒ミタル證人ハ期日ニ出頭スル義務ナシ
裁判所書記ハ拒絶ノ書面ヲ受領シ又ハ其陳述ニ付キ調査ヲ作リタル
トキハ之ヲ當事者ニ通知ス可シ

第三百一條 拒絶ノ當否ニ付テハ受訴裁判所當事者ヲ審訊シタル後決
定ヲ以テ其裁判ヲ爲ス但第二百九十八條第一號ノ場合ニ於テ爲シタ
ル拒絶ノ當否ニ付テハ所屬廳又ハ最後ノ所屬廳ノ裁定ニ任ス
原告若クハ被告カ出頭セサルトキハ出頭シタル者ノ申述ヲ斟酌シテ
決定ヲ爲ス

右決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告ハ執行ヲ停止スル
効力ヲ有ス

第三百二條 原因ヲ開示セスシテ證言ヲ拒ミ又ハ開示シタル原因ノ實
却確定シタル後ニ之ヲ拒ミタルトキハ申立ヲ要セスシテ決定ヲ以テ
證人ニ對シ其拒絶ニ因リテ生シタル費用ノ賠償及ヒ四十圓以下ノ罰

金ヲ言渡ス

證人ハ費用ノ賠償及ヒ罰金ノ言渡ニ對シ抗告ヲ爲スコトヲ得此抗告
ハ執行ヲ停止スル効力ヲ有ス

豫備後備ノ軍籍ニ在ラサル軍人軍屬ニ對スル罰金ノ言渡及ヒ執行ハ
軍事裁判所ニ囑託シテ之ヲ爲ス

第三百三條 原告若クハ被告ハ相手方ト相手方ノ證人トノ間ニ第二
百九十七條第一號乃至第三號ノ關係アルトキハ其證人ヲ忌避スルコト
ヲ得

第三百四條 忌避ノ申請ハ證人ノ訊問前ニ之ヲ爲ス可シ此期限後ハ其
前ニ忌避ノ原因ヲ主張スルヲ得サリシコトヲ説明スルトキニ限り其
證人ヲ忌避スルコトヲ得

忌避ノ申請ハ書面又ハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得
忌避ノ原因ハ之ヲ説明ス可シ

第三百五條 忌避ノ申請ニ付テノ裁判ハ口頭辯論ヲ經スシテ之ヲ爲ス
コトヲ得

民法（非訟事件手續法）

二十九

民法（非訟事件手続法）

忌避ノ原因アリト宣言スル決定ニ對シテハ上訴ヲ爲スコトヲ得ス忌
避ノ原因ナシト宣言スル決定ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
第三百六條 各證人ニハ其攜帶ス可キ呼出狀其他適當ノ方法ヲ以テ人
違ナラサルコトヲ判然ナラシメタル後訊問前各別ニ宣誓ヲ爲サシム
可シ

然レトモ宣誓ハ特別ノ原因アルトキ殊ニ之ヲ爲サシム可キヤ否ヤニ
付キ疑ノ存セルトキハ訊問ノ終ルマテ之ヲ延フルコトヲ得

第三百七條 證人ハ訊問前ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ
眞實ヲ述ヘ何事ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサル旨ノ誓ヲ宜フ可
シ

又訊問後ニ宣誓ヲ爲ス可キ場合ニ於テハ良心ニ從ヒ眞實ヲ述ヘ何事
ヲモ黙秘セス又何事ヲモ附加セサリシ旨ノ誓ヲ宜フ可シ

第三百八條 判事ハ宣誓前ニ相當ナル方法ヲ以テ宣誓者ニ偽證ノ罰ヲ
諭示ス可シ

第三百九條 宣誓ヲ拒ム證人ニ付テハ第三百條乃至第三百二條ノ規定

ヲ適用ス

第三百十條 左ノ者ハ宣誓ヲ爲サシメスシテ參考ノ爲メ之ヲ訊問スル
コトヲ得

第一 訊問ノ時未タ滿十六歳ニ達セサル者

第二 宣誓ノ何物タルヤヲ了解スルニ必要ナル精神上ノ發達ノ缺
クル者

第三 刑事上ノ判決ニ因リ公權ヲ剝奪又ハ停止セラレタル者

第四 第二百九十七條及ヒ第二百九十八條第三號並ニ第四號ノ規
定ニ依リ證言ヲ拒絕スル權利アリテ之ヲ行使セサル者但第二百
九十八條第三號並ニ第四號ノ場合ニ於テハ拒絕ノ權利ニ關スル
事實ニ付キ證言ヲ爲スコトヲ申立テラレタルトキニ限ル

第五 訴訟ノ成績ニ直接ノ利害關係ヲ有スル者

第三百十一條 證人訊問ハ後ニ訊問ス可キ證人ノ在ラサル場所ニ於テ
各別ニ之ヲ爲ス

證人ノ供述互ニ齟齬シタルトキハ之ヲ對質セシムルコトヲ得

民法（非訟事件手続法）

民法（非訟事件手続法）

三十二

第三百十二條 証人訊問ハ証人ニ其氏名、年齢、身分、職業及ヒ住居ヲ問フ
ヲ以テ始マル又必要ナル場合ニ於テハ其事件ニ於テ証言ノ信用ニ關
スル事情殊ニ當事者トノ關係ニ付テノ問ヲ爲ス可シ
第三百十三條 証人ニハ其訊問事項ニ付キ知りタルモノヲ率直シテ供
述セシム可シ

証人ノ供述ヲ明白及ヒ完全ナラシメ且其知り得タル原因ヲ穿鑿スル
爲メ必要ナル場合ニ於テハ尙ホ他ノ問ヲ發ス可シ

第三百十四條 証人ハ其供述ニ換ヘテ書類ヲ朗讀シ其他覺書ヲ用非ル
コトヲ得ス但算數ノ關係ニ限リ覺書ヲ用ルコトヲ得

第三百十五條 陪席判事ハ裁判長ニ告ケテ証人ニ問ヲ發スルコトヲ得
當事者ハ証人ニ對シ自ラ問ヲ發スルコトヲ得然レトモ當事者ハ証
人ノ供述ヲ明白ナラシムル爲メ其必要ナリトスル問ヲ發センコトヲ
裁判長ニ申立ツルコトヲ得

發問ノ許否ニ付キ異議アルトキハ裁判所ハ直チニ之ヲ裁判ス

第三百十六條 調書ニハ証人カ其訊問ノ前若クハ後ニ宣誓シタルヤ又

ハ宣誓セシメテ訊問ヲ受ケタルヤヲ記載ス可シ

第三百十七條 受訴裁判所ハ左ノ場合ニ於テ証人ノ再訊問ヲ命スルコ
トヲ得

第一 証人訊問カ法律上ノ規定ニ違ヒタルトキ

第二 証人訊問ノ完全ナラサルトキ

第三 証人ノ供述カ明白ナラス又ハ兩義ニ涉ルトキ

第四 証人カ其供述ノ補充又ハ更正ヲ申立ツルトキ

第五 此他裁判所カ再訊問ヲ必要トスルトキ

第三百十八條 左ノ場合ニ於テ証人ニ依レル證據調ハ受訴裁判所ノ部
員一名ニ之ヲ命シ又ハ區裁判所ニ之ヲ囑託スルコトヲ得

第一 眞實ヲ探知スル爲メ現場ニ就キ証人ヲ訊問スルノ必要ナル
トキ

第二 証人カ疾病其他ノ事由ノ爲メ受訴裁判所ニ出頭スル能ハサ
ルトキ

第三 証人カ受訴裁判所ノ所在地ヨリ遠隔ノ地ニ在リテ裁判所ニ

民法（非訟事件手続法）

三十三

出頭スルニ付キ不相應ノ時日及ヒ費用ヲ要スルトキ

第三百十九條 第二百九十四條、第二百九十五條、第三百二條及ヒ第三百九條ニ掲ケタル證人ニ對スル受訴裁判所ノ權ハ受命判事又ハ命託判事ニモ屬ス

證人カ受命判事又ハ受託判事ノ面前ニ於テ理由ヲ開示シテ證言ヲ拒ミ又ハ宣誓ヲ拒ミ又ハ職權若クハ申立ニ因リ強シタル問ニ答フルコトヲ拒ムトキハ此受絶ノ當否ニ付キ裁判ヲ爲ス權ハ受命裁判所ニ屬ス

受命判事又ハ受託判事カ原告若クハ被告ヨリ申立テタル問ヲ發スルコトヲ拒ムトキハ原告若クハ被告ハ其當否ニ付キ受訴裁判所ノ裁判ヲ求ムルコトヲ得

證人ノ再訊問ハ受命判事又ハ受託判事ノ意見ヲ以テ之ヲ命スルコトヲ得

第三百二十條 證人ヲ申出テタル原告若クハ被告ハ其訊問ノ開始マテハ此證據方法ヲ拋棄スルコトヲ得其後ハ相手方ノ承諾ヲ得ルトキニ

限リ之ヲ拋棄スルコトヲ得

第三百二十一條 各證人ハ日常ノ辨濟及ヒ其出頭ノ爲ニ旅行ヲ要スルトキハ旅費ノ辨濟ヲ請求スルコトヲ得

此金額ノ拂渡ハ訊問期日ノ終リタル後直チニ之ヲ求ムルコトヲ得
舉證者ノ豫納シタル金額不足スルトキハ職權ヲ以テ其不足額ヲ取立ツ可シ

第七條 檢事ハ證人訊問ニ立會ヒ決定前ニ其意見ヲ陳述ス可シ

第八條 失踪ノ推定又ハ宣言ヲ言渡ス決定ハ裁判所ノ掲示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ公示ス可シ

此決定ニ對シテハ請求者又ハ檢事ヨリ民事訴訟法ノ規定ニ從ヒ即時抗告ヲ爲スコトヲ得失踪者ノ定置ヤタル總理代理人モ亦同シ

第九條 失踪事件ノ請求ニ關スル費用ハ其推定又ハ宣言ヲ言渡シタルトキハ本人ノ財産ヲ以テ之ヲ支辨シ若シ之ヲ言渡ササルトキハ

請求者之ヲ負擔ス但檢事請求ヲ爲シタルトキハ本人ノ負擔トス

第三章 相続ノ限定受諾ニ關スル手續

第十條 限定受諾者ハ適法ノ期間内ニ相続財産拂盡ノ計算ヲ完了シ其計算書ヲ相続地ノ區裁判所ニ差出ス可シ

第十一條 利害關係人ハ自己ノ費用ヲ以テ區裁判所ニ計算書ノ閱覽及ヒ其謄本ノ下付ヲ求ムルコトヲ得

第十二條 法律上又ハ裁判上相続財産ヲ管理スル者ハ限定受諾者ト同シク計算完了ノ責ニ任ス

第四章 國ニ囑スル相続財産收領ノ手續

第十三條 相続人アラサル財産アルトキハ相続地ノ地方行政官廳ハ財産所在地ノ區裁判所ニ其引渡ヲ請求ス可シ

第十四條 財産引渡ノ請求ヲ受ケタル裁判所ハ事實ヲ調査シ其請求ヲ公示ス可シ

第十五條 公示ハ左ノ諸件ヲ具備シ請求ヲ受ケタル區裁判所ノ揭示板ニ揭示シ且官報又ハ公報ニ掲載シテ之ヲ爲ス可シ

第一 被相続人ノ氏名、職業、住所、居所及ヒ死亡ノ年月日

第二 財産引渡ノ請求ノ要領

第十六條 民法ノ規定ニ從ヒ相続權ヲ有スル者ハ公示ノ日ヨリ六個月内ニ行政官廳ノ請求ニ對シ其請求ヲ受ケタル裁判所ニ異議ヲ申立ツルコトヲ得

第十七條 前條ノ期間内ニ異議ノ申立アラズ又ハ其申立ヲ不當ト爲ス裁判確定シタルトキハ裁判所ハ民法財産取得編第三百四十六條ノ規定ニ從ヒテ保存スル供託所ノ金額領收證ヲ請求者タル行政官廳ニ交付ス可シ

○參照（民法財産取得編）

第三百四十六條 管理人ハ計算ヲ完了シテ尙ホ相続財産ノ存スルニ於

テハ區裁判所ノ許可ヲ得テ之ヲ競賣ニ付シ其得タル金額ヲ供託所ニ供託ス可シ

管理人ハ其領收證ヲ區裁判所ニ送付シ區裁判所ハ之ヲ保存ス可シ

第五章 財産ノ封印及ヒ目錄調製ノ手續

第十八條 財産ノ封印ハ利害關係人又ハ檢事ノ請求ニ因リ其財産所在地ノ區裁判所判事之ヲ爲ス

封印ニハ官印ヲ用ユ可シ

第十九條 封印ヲ爲ス可キ財産カ遠隔ノ地ニ在ルトキハ區裁判所判事ハ市町村長ニ囑託シテ封印ヲ爲サシムルコトヲ得封印ノ除去及ヒ財産目錄ノ調製ニ付テモ亦同シ

囑託ヲ受ケタル市町村長ニ付テモ下數條ノ規定ヲ準用ス

第二十條 封印ハ證人二人立會ノ上之ヲ爲ス可シ
封印ヲ請求シタル者ハ其封印ニ立會フコトヲ得

第二十一條 封印ヲ爲シタルトキハ直チニ調書ヲ作り立會人之ニ署名捺印ス可シ若シ署名捺印スルコト能ハサルトキハ區裁判所判事其事由ヲ附記ス可シ

第二十二條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印ヲ請求シタル者ノ氏名、職業及ヒ住所

第二 封印ノ理由

第三 封印ヲ爲シタル場所及ヒ物

第二十三條 日用品其他封印ヲ附セサル物アルトキハ之ヲ調書ニ略記ス可シ

第二十四條 封印ヲ附シタル物ニ鎖鑰アルトキハ之ヲ閉鎖シテ封印除去ニ至ルマテ區裁判所書記課其鑰ヲ預ル可シ

第二十五條 封印ヲ終リタルトキハ其財産ノ保管人ヲ命ス可シ但保管人ハ成年者タルコトヲ要ス

第二十六條 區裁判所判事封印ノ請求ヲ受ケタルトキハ速ニ之ヲ爲
ス可シ若シ後レタルトキハ其理由ヲ調書ニ記載スルコトヲ要ス
第二十七條 封印ノ調書ハ判事ト同伴シタル書記之ヲ二通ニ作り其
一通ハ區裁判所ノ書記課ニ保存シ他ノ一通ハ封印請求者又ハ保管
人ニ交付シ受領證ヲ取置ク可シ
第二十八條 何人ニ限ラズ區裁判所判事ヨリ封印ノ立會ヲ求メラレ
タル者正當ノ理由ナクシテ之ヲ拒ムトキハ刑法第七十九條ニ揭
ケタル刑ニ處ス

○參照(刑法)

第七十九條 醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分拆又ハ鑑定
ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四十圓以下
ノ罰金ニ處ス

第二十九條 封印ノ除去ヲ請求スル權利ヲ有スル者左ノ如シ

第一 封印ヲ請求スル權利ヲ有スル者

第二 財産ノ管理人

第三十條 封印ノ除去ハ豫メ其日時ヲ定メ既ニ知レタル利害關係人
及ヒ財産ノ管理人ニ之ヲ通知スヘシ
通知ヲ受ケテ封印除去ノ異議ヲ申立テス且除去ニ立會ハサル者ハ
其除去ヲ承諾シタルモノト看做ス

第三十一條 封印ハ一箇ノ物ニ付キ之ヲ除去シ其目錄ヲ作り了リタ
ル後ニ非サレハ次ノ物ニ付キ之ヲ除去スルコトヲ得ス

第三十二條 封印ノ除去ハ封印ヲ爲ス時ト同シク證人立會ノ上之ヲ
爲ス可シ

第三十三條 左ニ記載シタル者ハ封印ノ除去ニ付キ異議ヲ申立ルコ
トヲ得

第一 利害關係人

第二 財産ノ管理人

第三 検事

第三十四條 封印ヲ除却シタルトキハ第二十一條ノ規定ニ從ヒ直チ
ニ其調印ヲ作ルヘシ

第三十五條 調書ニハ左ノ諸件ヲ具備ス可シ

第一 封印除去ノ異議アラサリシコト又異議アリタルトキハ其異
議申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ取下ケタルコト

第二 封印ヲ爲シタルヨリ之ヲ除去スルニ至ルマテ其封印ニ何等
ノ變更ヲ來ササリシコト若シ變更ヲ來セシトキハ其事情

第三十六條 封印ヲ爲シ及ヒ之ヲ除去スル費用ハ其財産ノ負擔トス
第三十七條 封印除去ノ異議ハ其封印ヲ爲シタル區裁判所ニ之ヲ申
立ツ可シ

異議申立ニハ申立人ノ關係及ヒ申立ノ理由ヲ包含ス可シ

第三十八條 異議ヲ申立テタルトキハ其申立ノ却下セラレ又ハ之ヲ
取下ケタル後ニ非サレハ封印ノ除去ヲ爲スコトヲ得ス

第三十九條 封印除去ノ異議ハ其除去ニ著手シタル後ハ之ヲ爲スコ
トヲ得ス

第四十條 異議申立ノ裁判ニ對シテハ不服ヲ申立ツルコトヲ爲ス

第四十一條 財産目録ハ財産ニ封印アルトキハ其除去ノ際公證人ヲ
シテ之ヲ作ラシム可シ

第四十二條 財産目録ハ左ノ各人ヲ適法ニ呼出シ區裁判所判事ノ面
前ニ於テ之ヲ作ル可シ

第一 知レタル利害關係人

第二 財産ノ管理人

第三 検事

第四十三條 目録ニハ左ノ諸件ヲ具備スヘシ

- 第一 適法ニ呼出サレタル人
- 第二 出席シタル者及闕席シタル者
- 第三 各不動産ノ形状
- 第四 動産ノ種類及ヒ數量
- 第五 證書類
- 第四十四條 財産目録ニハ立會ヒタル各人署名捺印ス可シ
- 第四十五條 目録ノ調製ニ關スル費用ハ其財産ノ負擔トス

○辨濟提供規則（明治二十三年十月勅令第二百十七號）

朕辨濟提供規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム本規則ハ明治二十六年一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

辨濟提供規則

第一條 民法財産編第四百七十四條ニ依レハ辨濟ノ提供ハ執達吏ヲ

シテ之ヲ爲サシム可シ

○參照（民法財産編）

- 第四百七十四條 債權者カ辨濟ヲ受ケルヲ欲セス又ハ之ヲ受ケル能ハサルトキハ債務者ハ左ノ區別ニ從ヒ提供及ヒ供託ヲ爲シテ義務ヲ免カルルコトヲ得
 - 第一 債務カ金錢ヲ目的トスルトキハ提供ハ貨幣ヲ提示シテ之ヲ爲スコトヲ要ス
 - 第二 債務カ特定物ヲ目的トシ其存在スル場所ニ於テ引渡サル可キトキハ債務者ハ其物ノ引取ノ爲メ債權者ニ催告ス
 - 第三 特定物ヲ債權者ノ住所其他ノ場所ニ於テ引渡ス可クシテ其運送カ多費困難又ハ危険ナルトキハ債務者ハ合意ニ從ヒテ引渡ヲ即時ニ實行スル準備ヲ爲シタルコトヲ提供中ニ述フ定置物ニ關シテモ亦同シ
 - 第四 債權者ノ立會又ハ參同ヲ要スル作爲ノ義務ニ關シテハ義務者カ義務履行ノ準備ヲ爲シタルコトヲ述フルヲ以テ足ル

第二條 提供ヲ爲スノ委任ヲ受ケタル執達吏ハ調書ヲ作り其調書ニハ提供物金銭ナルトキハ其種類員數ヲ記シ特定物ナルトキハ他物ニ換ユルコト能ハサラシムル爲メ其詳細ヲ記シ定量物ナルトキハ其種類品質數量ヲ記ス可シ

第三條 右ノ調書ニ付テハ民事訴訟法第五百四十條ノ規定ヲ準用ス

○参照（民事訴訟法）

第五百四十條 執達吏ハ各執行行爲ニ付調書ヲ作ル可シ

此調書ニハ左ノ諸件ヲ具備スルコトヲ要ス

- 第一 調書ヲ作りタル場所、年月日
- 第二 執行行爲ノ目的物及ヒ重要ナル事情ノ略記
- 第三 執行ニ與カリタル各人ノ表示
- 第四 右各人ノ署名捺印
- 第五 調書ヲ其各人ニ閲覧セ又ハ閲覧セシメ其承諾ノ後署名捺印ヲ爲シタルコトノ開示

第六 執達吏ノ署名捺印

第四號及ヒ第五號ノ要件ヲ具備スルコト能ハサルトキハ其理由ヲ記載スヘシ

第四條 執達吏提供ノ委任ヲ受ケテ之ヲ爲シタルトキハ手数料金二十錢其他執達吏手数料規則ニ從ヒ立替金ヲ受クルモノトス

○供託規則（明治廿三年七月勅令第百四十五號）

朕供託規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

供託規則

第一條 法律ノ規定ニ依リ供託スル所ノ金銭有價証券ハ總テ大藏省預金局ニ於テ之ヲ保管スヘシ

第二條 供託シタル金銭ハ拂込ノ日ヨリ六十日ヲ過ルトキハ拂込ノ翌月ヨリ拂渡請求ノ前月マテ通常預金ノ利子ヲ付スヘシ

第三條 供託ヲ爲サントスルトキハ大藏大臣定ムル所ノ式ニ依リ供託書ヲ製シテ供託物ニ添ヘ其申込ヲ爲スヘシ

第四條 供託者ハ^(イ)民法財産編第四百七十七條^(ロ)債權擔保編第二百六十八條及^(ニ)商法第七百四十條ノ場合ニ於テハ其供託シタル旨ヲ債權者ニ通知スヘシ

○參照(民法財産編)

(イ)第四百七十七條 債權者カ提供ヲ承諾セサルトキハ債務者ハ供託ノ日マテニ債務ニ生シタル填補利息ト共ニ辨濟ノ金額ヲ供託所ニ供託スルコトヲ得

特定物又ハ定量物ニ付テハ債務者ハ其物ヲ供託ス可キ場所ヲ指定スルコト及ヒ其保管人ニ選任スルコトヲ裁判所ニ請求ス

供託ノ方式及ヒ條件ハ特別法ヲ以テ之ヲ規定ス

(民法債權擔保編)

(ロ)第二百六十八條 孰レノ債權者ヨリモ有效ニ競賣ヲ求メサリシトキ

ハ不動産ノ滲除ハ債權者間ノ熟議上若クハ裁判上ノ順序配當ニ依ル辨濟ヲ以テ又ハ債權者ノ名ニ於テスル供託ヲ以テ不動産ヲ滲除ス但此供託ニ付テハ豫メ實物提供ヲ爲スコトヲ要セス

此場合ニ於テ總テノ抵當ハ之ヲ抹消ス其元資ノ不足シタルモノト雖モ亦同シ

(商法)

(ハ)第七百四十條 提出人及ヒ裏書譲渡人ハ擔保ヲ爲スニ換ヘテ前條ニ掲ケタル一切ノ金額ヲ即時ニ所持人ニ支拂ヒ又ハ即時ニ供託所ニ寄託スルコトヲ得

第五條 供託物ハ供託者ノ指定シタル者ニ拂渡シ又ハ裁判所ノ通知ニ係リ拂渡スヘキモノトス但供託者ニ於テモ其受領スヘキ理由アルコトヲ證明シ返戻ヲ請求スルコトヲ得

第六條 有價証券ノ償還金利息又ハ配當金ヲ受取ントスルトキハ有權者ヨリ大藏省預金局ニ請求スヘシ此請求ナキトキハ政府ハ損害

ノ責ニ任セサルヘシ

第七條 前條ノ請求ニ依リ大藏省預金局ニ於テ受取リタル償還金
子又ハ配當金ハ代供託物又ハ附屬供託物トシテ之ヲ保管スヘシ

商法

○商法施行條例（明治廿三年八月 法律第五十九號）

朕商法施行條例ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム此法律ハ明治二十四年
一月一日ヨリ施行スヘキコトヲ命ス

商法施行條例

第一條 （イ） 商法第二十六條 （ロ） 第二十九條及ヒ （ハ） 第二百十條ニ定メテ
ル一地域トハ各市町村ノ一區域ヲ謂ヒ市町村制ヲ行ハサル地方ニ
在テハ從來ノ宿驛町村等ノ一區域ヲ謂フ
一地域内ニ二箇以上ノ區裁判所アルトキハ其内一箇所ヲ以テ登記
簿ヲ取扱フ所トス其裁判所ハ司法大臣之ヲ指定ス

○參照（商法）

（イ）第二十六條 商號ハ登記ニ因リ同一營業ニ付キ一地域内ニ於テ其事

商法（商法施行條例）

商法 (商法施行條例)

有ノ權利ヲ取得シ他人之ヲ用ユルコトヲ得ス但本法施行以前ヨリ有
スル商號ハ從前ノ營業ヲ變セサルモノニ限り一地域内ニ於テ同一ナ
ルヲ妨ナシ

(ロ)第二十九條 營業ト商號トヲ併セテ讓渡ス者更ニ其營業ヲ爲ササル
責務ヲ負擔シタルトキハ其責務ノ履行ハ爾後十個年間其一地域内ニ
限ル

(ハ)第二百十條(第二項) 營業所ヲ移轉スルトキハ舊所在地ニ於テ移轉ノ
登記ヲ受ケ新所在地ニ於テハ新々ニ設立スル會社ニ付キ要スル諸件
ノ登記ヲ受ケ可シ又同一ノ地域内ニ於テ移轉スルトキハ移轉ノミノ
登記ヲ受ケ可シ

第二條 會社ニ非スシテ商業ヲ營ム者ハ其商號ニ會社ノ文字ヲ用ユ
ルコトヲ得ス又從來之ヲ用ユル者ハ商法實施ノ日ヨリ三個月内ニ
之ヲ改ム可シ

前項ノ規定ニ違フ者ハ地方裁判所ノ命令ヲ以テ二十圓以下ノ過料
ニ處ス

第三條 (イ) 商法第百五十九條 (ロ) 第百六十六條 (ハ) 第百六十八條 (ニ)
百二十二條ノ規定ニ依リテ官廳ニ差出ス書類及ヒ展閱ニ供スル書
類ハ公證人ノ認證ヲ受ケタル謄本ヲ以テスルコトヲ得
公證人謄本認證ノ依頼ヲ受ケタルトキハ一件ニ付キ金拾錢ノ手數
料若シ認證ト共ニ謄寫ノ依頼ヲ受ケタルトキハ (ホ) 公證人規則第六
十五條ノ謄本手數料ヲ受クルコトヲ得

○參照(商法)

(イ)第百五十九條 發起人ハ會社ヲ設立ス可キ地ノ地方長官ヲ經由シテ
目論見書及ヒ假定款ヲ主務省ニ差出シ發起ノ認可ヲ請フコトヲ要ス
(ロ)第百六十六條 創業總會ノ終リシ後發起人ハ地方長官ヲ經由シテ主
務省ニ會社設立ノ免許ヲ請フ其申請書ニハ左ノ書類ヲ添フ可シ

商法 (商法施行條例)

商法（商法施行條例）

六

至第六號ニ列記シタルモノノ外尙ホ左ノ事項ヲ網ケルコトヲ要ス

第一 合資會社ナルコト

第二 會社資本ノ總額

第三 各社員ノ出資額

第四 無限責任社員アルトキハ其氏名

第五 業務擔當人社員又ハ取締役アルトキハ其氏名及ヒ其責任ノ

有限又ハ無限ナルコト

（第七十九條第二號乃至第六號ニ列記シタル事項）

第二 會社ノ目的

第三 會社ノ商號及ヒ營業所

第四 各社員ノ氏名、住所

第五 設立ノ年月日

第六 存立時期ヲ定メタルトキハ其時期

（ハ）第百六十八條（第三條參照（イ）ニ據テ）

（ニ）第二百五十六條 業務擔當ノ任アル社員又ハ取締役ハ左ノ場合ニ於テハ五圓以上五十圓以下ノ過料ニ處セラレ

第六條 前條ノ期限内ニ登記ヲ受ケサル既設會社ハ其期限經過ノ時

ヨリ第三者ニ對シテ會社ナル効ヲ失フ

第七條 商法第八十一條及ヒ（イ）第八十二條ノ規定既設會社ニ之ヲ

適用セス

○參照（商法）

（イ）第八十一條 會社ハ登記前ニ開業スルコトヲ得ス之ニ違フトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ其營業ヲ差止ム但其命令ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

（ロ）第八十二條 會社其登記ノ日ヨリ六个月内ニ開業セサルトキハ其登記及ヒ公告ハ無効ナリ

第八條 既設會社ハ從來ノ商號ヲ續用スルコトヲ得但（イ）商法第一百十三條及ヒ（ロ）第百三十九條第二項ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ三個月

商法（商法施行條例）

七

ノ後既設會社ノ商號ニモ之ヲ適用ス
既設會社ノ商號ニハ其會社ノ種類ニ從ヒ合名會社合資會社又ハ株式會社ノ文字ヲ附ス可シ

○參照(商法)

(イ)第百十三條 社員ニ非スシテ商號ニ其氏ヲ表スルコトヲ承諾シ若クハ之ヲ表スルニ任セ又ハ會社ノ業務ノ施行ニ與カリ又ハ事實社員タルノ權利義務ヲ有スル者ハ社員ト同シク選舉無限ノ責任ヲ負フ
(ロ)第百三十九條(第二項) 若シ商號ニ社員ノ氏ヲ用井タルトキハ其社員ハ此カ爲メ當然會社ノ職務ニ對シテ無限ノ責任ヲ負フ

第九條 既設合名會社ハ其社員ノ數商法第七十四條ノ定員ニ超ユルモ其現社員ノ數ニ依ルコトヲ得但定員以下ニ減シタル場合ニ於テハ更ニ増員シテ其定員ニ超ユルコトヲ得ス

○參照(商法)

第七十四條 二人以上七人以下共通ノ計算ヲ以テ商業ヲ營ム爲メ金錢

又ハ有價物又ハ勞力ヲ出資ト爲シテ共有資本ヲ組成シ責任其出資止マラサルモノヲ合名會社ト爲ス

第十條 既設株式會社ハ商法第百五十六條ノ免許ヲ受クルコトヲ要セス

既設株式會社ハ商法實施ノ日ヨリ六个月内ニ地方長官ヲ經由シテ定款ヲ主務省ニ差出シ其定款ノ認可ヲ受ク可シ但其定款ニ法律命令ニ反スル事ヲ掲ケタルモノハ之ヲ改正スルニ非サレハ認可スルノ限ニ在ラス

從來官許ヲ得テ設立シタル株式會社ニハ前項ノ規定ヲ適用セス但聞置又ハ人民ノ相對ニ任ス等ノ指令ヲ得テ設立シタルモノハ此限ニ在ラス

本條第二項ニ依リ認可ヲ受ク可キ株式會社ニ在テハ第五條ノ登記期限ハ其認可ヲ得タル日ヨリ起算ス

右ノ認可ヲ得タル日ヨリ六个月内ニ登記ヲ受ケサルトキハ其認可ハ効力ヲ失フ

○参照(商法)

第五十六條 株式會社ハ七人以上ヲ以テシ且政府ノ免許ヲ得ルニ非サレハ之ヲ設立スルコトヲ得ス

第十一條 既設株式會社ハ其株券ノ金額商法第七十五條ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

○参照(商法)

第七十五條 各株式ノ金額ハ會社資本ヲ一定平等ニ分チタルモノニシテ二十圓ヲ下ルコトヲ得ス又其資本十萬圓以上ナルトキハ五十圓ヲ下ルコトヲ得ス

第十二條 既設株式會社ハ其定款ニ於テ第一回ノ株金拂込ヲ四分一以下ニ定メタルトキハ商法第六十七條第二項ノ規定ニ反スルモ其定款ノ定ニ依ルコトヲ得

○参照(商法)

第六十七條(第二項) 取締役ハ速ニ株式主ヲシテ各株式ニ付キ少ナクトモ四分一ノ金額ヲ會社ヘ拂込マシム

第十三條 既設株式會社ノ創業ニ付テノ義務及ヒ出費ニシテ會社ノ承認ヲ經タルモノハ第五條ノ登記ヲ受ケサル前ニ於テモ商法第七十一條ノ規定ニ拘ハラズ會社ニ於テ之ヲ負擔ス

○参照(商法)

第七十一條 登記前ニ在テハ創業總會ノ承認ヲ經タル義務及ヒ出費ニ付キ發起人取締役及ヒ株主ニ於テ連帶無限ノ責任ヲ負フ

第十四條 既設株式會社ノ既ニ發行シタル株券ハ商法第七十六條ニ反スルモノ有ルモ之ヲ改ムルコトヲ要セス

○参照(商法)

第七十六條 株式ハ一株毎ニ株券一通ヲ作リ之ニ其金額、發行ノ年月日、番號、商號、社印、取締役ノ代名、印及ヒ株主ノ氏名ヲ載ス

第十五條 既設株式會社ニ於テ株金全額ノ拂込前ニ發行シタル株券ハ其全額拂込ニ至ルマテハ之ヲ假株券ト看做ス

第十六條 既設株式會社ノ株券ニシテ商法實施前ヨリ株式取引所又ハ取引所ニ於テ既ニ賣買シ來リタルモノ及ヒ既ニ債權ノ擔保ニ供シタルモノニ付テハ商法第百八十條ノ規定ヲ適用セス

○參照(商法)

第百八十條 株金額少ナクトモ四分一ノ拂込前ニ爲シタル株式ノ讓渡ハ無効タリ

第十七條 既設株式會社ノ株式ノ讓渡人ニ付テハ商法第百八十二條ノ規定ハ商法實施ノ日ヨリ二個年間之ヲ適用セス

○參照(商法)

第百八十二條 株金半額拂込前ノ株式ノ讓渡人ハ會社ニ對シテ其株金未納額ノ擔保義務ヲ負フ

第十八條 既設株式會社ニ於テ既ニ其定款ヲ以テ株主ノ議決權ニ制限ヲ立テタルモノハ商法第二百四條ノ規定ニ反スルモ其定款ニ從フコトヲ得

○參照(商法)

第二百四條 株主ノ議決權ハ一株毎ニ一箇タルヲ通例トス然レトモ十一株以上ヲ有スル株主ノ議決權ハ定款ヲ以テ其制限ヲ立ツルコトヲ得

第十九條 商法第七十七條第一項ノ規定ハ既設會社ニ之ヲ適用セス

○參照(商法)

第七十七條(第一項) 會社ハ書面契約ニ因リテノミ之ヲ設立スルコトヲ得其契約書ハ總社員之ニ連署シ各自一通ヲ所持ス

第二十條 商法及ヒ本條例ニ依リ發スル命令書ヲ送達スル場合ニ於テハ其手續ハ民事訴訟法ノ手續ニ從フ

第二十一條 商法第六十七條第二項、第八十一條、第二百二十七條

(三) 第三百三十一條 (ホ) 第三百三十三條 (ハ) 第二百五十條及ヒ (ト) 第二百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ裁判所ニ於テ命令ヲ發スルトキハ當事者ヲシテ説明ヲ爲サシムル爲メ之ヲ裁判所ニ呼出スヲ通例トス但當事者缺席スルモ命令書ハ之ヲ發スルコトヲ得

○參照(商法)

(イ)第六十七條(第二項) 若シ會社ノ營業カ公安又ハ風俗ヲ害ス可キトキハ裁判所ハ檢事若クハ警察官ノ申立ニ因リ又ハ職權ニ依リ其命令ヲ以テ之ヲ解散セシムルコトヲ得但其命令ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

(ロ)第八十一條 會社ハ登記前ニ開業スルコトヲ得ス之ニ違フトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ其營業ヲ差止ム但其命令ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコト得

(ハ)第二百二十七條 第六十七條ニ掲ケタル場合ノ外會社其目的ヲ達スルコト能ハス又ハ會社ノ地位ヲ維持スルコト能ハサルノ理由ヲ以テ一

人又ハ數人ノ社員ヨリ會社ノ解散ヲ申立ツルトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ解散セシムルコトヲ得

會社ノ地位ヲ維持スルコト能ハサル場合ニ於テ會社ノ解散ニ換ヘテ或ル社員ヲ除名ス可キコトヲ他ノ總社員ヨリ相當ノ理由ヲ以テ申立ツルトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ除名スルコトヲ得

前二項ニ掲ケタル裁判所ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得 (ニ)第三百三十一條 清算人ノ權ハ社員之ヲ制限スルコトヲ得ス且重要ナル事由ニ基ク社員ノ申立ニ因リ裁判所ノ命令ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ解任スルコトヲ得ス但其命令ニ對シ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

(ホ)第三百三十三條 前條ニ掲ケタル解散ノ決議又ハ清算人ノ選定ヲ爲ササルトキハ裁判所ハ債權者若クハ株主ノ申立ニ因リ又ハ職權ニ依リ其命令ヲ以テ決議ニ換ヘ又ハ清算人ヲ任スルコトヲ得

(ハ)第二百五十條 清算ノ終リタル後清算人ハ總計算書及ヒ一般ノ事務報告書ヲ總會ニ差出シテ卸任ヲ求ム若シ總會ニ於テ卸任ヲ許ササルトキハ裁判所ハ清算人ノ申立ニ因リ其命令ヲ以テ之ヲ許スト否トヲ

定△但其命令ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

(ト)第二百六十一條 前數條ニ掲ケタル過料ハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ科ス但其命令ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

過料ノ辨納ニ付テハ業務擔當ノ任アル社員、取締役又ハ清算人連帶シテ其責任ヲ負フ

第二十二條 商法第六十七條第二項、第八十一條、^(イ)第二百二十七條

及ヒ^(三)第二百六十一條並ニ本條例第二條及ヒ第五條ニ依リ命令ヲ爲ス場合ニ於テハ裁判所ハ豫メ其旨ヲ檢事ニ通知ス可シ
檢事ハ口頭又ハ書面ヲ以テ意見ヲ陳述スルコトヲ得

○參照(商法)

(イ)第六十七條第二項 (前條參照) ^(イ)ニ掲ケ

(ロ)第八十一條 會社ハ登記前ニ開業スルコトヲ得ス之ニ違フトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ其營業ヲ差止△但其命令ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

(ハ)第二百二十七條 第六十七條ニ掲ケタル場合ノ外會社其目的ヲ達スルコト能ハス又ハ會社ノ地位ヲ維持スルコト能ハサルノ理由ヲ以テ一人又ハ數人ノ社員ヨリ會社ノ解散ヲ申立ツルトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ解散セシムルコトヲ得

會社ノ地位ヲ維持スルコト能ハサル場合ニ於テ會社ノ解散ニ換ヘテ或ル社員ヲ除名ス可キコトヲ他ノ社員ヨリ相當ノ理由ヲ以テ申立ツルトキハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ除名スルコトヲ得

前二項ニ掲ケタル裁判所ノ命令ニ對シテハ即時抗告ヲ爲スコトヲ得
(ニ)第二百六十一條 前數條ニ掲ケタル過料ハ裁判所ノ命令ヲ以テ之ヲ科ス但其命令ニ對シテ即時抗告ヲ爲スコトヲ得

過料ノ辨納ニ付テハ業務擔當ノ任アル社員、取締役又ハ清算人連帶シテ其責任ヲ負フ

第二十三條 檢事ハ前條第一項ノ場合ニ於ケル命令ニ付キ其執行ノ責ニ任ス

第二十四條 商法及ヒ本條例ニ依リ即時抗告ヲ爲スコトヲ得ヘキ場合ニ於テハ其期間ハ裁判書ノ送達ヲ受ケタル日ノ翌日又ハ裁判ノ言渡ヲ受ケタル日ノ翌日ヨリ起算シテ七日トス

第二十五條 前條ニ掲ケタルモノノ外抗告ニ關スル手續ニ付テハ(イ)民事訴訟法第四百五十五條、第四百六十條第一項第二項、第四百六十五條及ヒ(ニ)第四百六十六條第一項第二項第四項ヲ除ク外總テ同法第三編第三章ノ規定ヲ準用ス

○參照民事訴訟法第三編第三章(抗告)

(イ)第四百五十五條 抗告ハ訴訟手續ニ關スル申請ヲ口頭辯論ヲ經スシテ却下シタル裁判ニ對シ其他此法律ニ於テ特ニ掲ケタル場合ニ限リ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十六條 抗告ニ付テハ直近ノ上級裁判所其裁判ヲ爲ス
抗告裁判所ノ裁判ニ對シテハ其裁判ニ因リ新ナル獨立ノ抗告理由ヲ生シタルトキニ非サレハ更ニ抗告ヲ爲スコトヲ得ス

第四百五十七條 抗告ハ不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長ノ屬スル裁判所ニ抗告狀ヲ差出シテ之ヲ爲ス

訴訟カ區裁判所ニ繫屬シ若クハ管轄繫屬シタルトキ又ハ証人、鑑定人ヨリ若クハ証書ヲ提出スル義務アリト宣言ヲ受ケタル第三者ヨリ抗告ヲ爲ストキハ口頭ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得

第四百五十八條 抗告ハ新ナル事實及ヒ證據方法ヲ以テ證據ト爲スコトヲ得

第四百五十九條 不服ヲ申立テラレタル裁判ヲ爲シタル裁判所又ハ裁判長カ再度ノ考案若クハ新ナル提供ニ基キ抗告ヲ理由アリトスルトキハ不服ノ點ヲ更正シ又理由ヲシトスルトキハ裁判所又ハ裁判長ハ意見ヲ付シテ三日ノ期間内ニ抗告ヲ抗告裁判所ニ送付シ又適當トナル場合ニ於テハ訴訟記録ヲモ送附ス可シ

(ロ)第四百六十條 抗告ハ此法律ニ於テ別段ノ規定ヲ設ケタル場合ニ限り執行停止ノ効力ヲ有ス

然レトモ不服ヲ申立テラレタル裁判所又ハ裁判長ハ抗告ニ付テノ裁